

---

# 蒼い星 2nd Story

らんらら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蒼い星 2nd Story

### 【Nコード】

N8399E

### 【作者名】

らんらら

### 【あらすじ】

19歳になったミンクはこの秋から大学生。新しい出会いや刺激にどきどきなのです。一方シンカは格闘技に夢中！彼の応援する選手は地球の地下街、もっとも治安の悪い町の出身。そこには危険な組織も絡んでいて。そう。冒険の始まりなのです

## 1・新しい季節（前書き）

この作品は、『蒼い星』の続編となります。『蒼い星』から読まれることを推奨いたします。

## 1・新しい季節

1

太陽帝国、地球の北半球にある首都、ブルプール。

帝国一の巨大な都市に住む人々は、特権階級と呼ばれる通常の人々と、地下街に暮らす地下住民とに大別される。もともとは同じ価値をもった地域であったものが、経済事情などから格差が広がり、お互いに相手を特別視する状況となっている。

地上は、林立する巨大ビルディング、派手なネオンにホログラムの看板。音もなく飛び回る空挺は、中空を三層に分けて流れるように人や物を運ぶ。

地上では、今、ちょうど秋を迎えていた。

地上二十メートルまでに規制された並木は、美しく紅葉し、この時期の首都を彩る。

ブルプールの中心にそびえる百五十階立ての黒光りする豪華な建物。それが、この太陽帝国を治める中央政府ビルだ。

その最も高い位置にある居室で、まだ若干十八歳の皇帝は、新しい殖民惑星の調査結果に目を通していた。

彼の名はシンカ。ただのシンカだ。

辺境の惑星リユードで生まれ育った彼は、前皇帝の血を受け継いでいる。自分を育てた、母親を故郷とともに失うまで、そのことを知らずに育った。

少し長めのうねりのある金髪は、白い朝日を弾き、深い蒼の瞳に映える。この宇宙で、最も有名な青年である。青年、というにはまだ少し、幼さも残るが。

「ねえ、シンカ、おかしくない？」

シンカは、書類から目を上げ、執務室の戸口に立っている少女を見

つめる。

ミンクは、今日から、ブルプールの大学に通うのだ。  
十八になった彼女は、いつまでも、皇帝陛下の幼馴染で恋人、と言う立場だけで、この中央政府ビルに住んでいることができないと感じている。ミンクが新しいことに挑戦したいと思う気持ちは、シンカにも嬉しいことだった。

二人が、惑星リユードから、ここ地球の首都、ブルプールに住むようになってから、一年が過ぎ、先日、シンカの即位記念日の式典が、終わったばかりだった。

この一年で、太陽帝国皇帝として様々な経験を経て、成長したシンカに比べて、ミンクはあまり変化がないように思う。シンカにとってそれは、いつでも変わらず彼を待っていてくれる故郷のようで嬉しい事なのだが、彼女が大切にする友人セイ・リンが、ミンクに変わることを求めているようだ。

ミンクを縛り付けてもいけない。

そう、考える皇帝陛下は、笑顔で服装を気にする彼女に答える。

「似合っているよ。」

「それだけ？」

机の前までよってきて、シンカの目を覗き込む少女。

その色素のない赤い瞳は、くりりと瞬いて、魅力的だ。

「可愛いよ。」

「うん。シンカ大好き！」

軽く口付けを交わすと、少女は執務室から軽やかに出て行く。

やっぱり、生き生きしていて、いいな。シンカは思う。彼も、同じ十八歳なのだが、さすがに皇帝陛下が大学に通うわけには行かない。同年代の友達と楽しく日々を過ごす。憧れはある。

まあ、いい。シンカも、時間を作っては、密かに街へ降りる。そこで、一般人として、見聞を広げているつもりだ。友人もいる。

先日の即位記念式典の前に、軍務官や、友人にそのことがばれてしまったが、相変わらず続けている。なんでも、自分の目で見て決め

たい。皇帝として判断する責任を持つているからこそ、自信をもって判断できるように、知りたいことがたくさんある。

そう、今日も、ミストレイア・コーポレーションから派遣されているSPのジンロとともに、銀河一強い格闘家を決める大会を、見物に行く予定だ。ジンロは最近、上司に内緒で、どこにでも連れて行ってくれる。一人で行動されるよりはまし、と考えているようだ。

「危ないことになったら、レクトさんに知らせるっす。」

変わったなまりの彼は、そういつて笑う。レクトは、この太陽帝国の軍務官（軍部の最高司令官）であり、ジンロの所属する会社、ミストレイア・コーポレーションの統合本部長でもある。恐いものなしのシンカも、この男だけには、勝てない。それを知っているジンロは、ことあるごとにレクトの名前を出して釘をさす。

それでも、この地球の地下街で生まれ育った彼の協力で、シンカの冒険は、幅を広げた。シンカにとつて、歓迎すべきことだ。

シンカは、今日の試合のことを考えながら、手元にファイルしてある、ブルブルの再開発計画の資料を眺めた。

ブルブルの外れにある、ナンドウという地下街。通称、仏心街。遠い過去には、そこに大きな宗教団体の本部があつたためだが、今は、仏心ほどこの町に縁遠いものはないという意味を皮肉った呼び名。この街は、住民の四割が生活保護を必要とし、職業を持っていないものは労働者人口の六割に及ぶ。生活水準を評価する都市基準で言うと最低ランクだ。伝えられるその荒廃ぶりは、すさまじい。通りには、からだの一部を失った子供が物乞いをしている。哀れみを誘つてより多くの施しを受けるために親がやるのだ。親が子供とともにいるのはまだ、ましなほうで、生まれた子供はたいてい売られるか捨てられる。普通に夫婦の間に産まれる子供のほうが少ない。望まれて産まれる子供がいるのかどうか。出生数は確認できず、路上には自分の親を知らない子供たちが暮らしている。盗むこと、殺すこと、家族を捨てることなど、あたりまえに横行している。ただ、貧しいだけの、辺境の都市とは違う。

若者は子供を使って稼ぎ、大人はその上前をはねる。軍警察も、見捨てている。他都市から隔離されているかのように、交流はない。誕生、貧困、暴力、搾取、殺人、死。その、悪循環が続いている。ジシロは、どうしてもそこへは連れて行ってくれない。

それなら、自分で行くまでのこと。準備もしてある。今日、見に行く、格闘技の試合には、この街の出身の青年が出場するという。この最悪の街から這い上がって、有名な格闘家になっている彼を、仏心街のみならず、すべての地下街の住民が応援していた。シンカは、この選手、アド・エトロに、興味があった。

## 1・新しい季節2

会場は熱気に包まれている。

銀河戦と呼ばれる大会の、今日は準決勝なのだ。太陽帝国領内のすべての惑星から挑戦者が集い、結局、アド・エトロと、前王座のルツシーニ・エストーナを含む四人が、この会場で決勝戦への出場をかけて戦う。

コールを受け、こぶしを突き上げるアド。若干二十歳の彼は、張りのあるつややかな腕の筋肉、長い手足、身長は百九十八センチ。地球人でこの年齢でこの身長というのは、恵まれているとしか言いようがない。しかも、彼はまだ、成長の途中なのだ。茶色身のかつた金髪を短くし、高い鼻を持つ彫りの深い容貌が女性のファンをひきつける。

わっと沸く歓声に、女性の声が混じる。

今日の相手は、前王者。ルツシーニ・エストーナは三十歳。油の乗ったベテランで、褐色のポリウムのある体格は、アドより二周りは確実に大きい。

「アドは不利だな。」

シンカがつぶやくと、隣のジンロが笑った。

「戦い方を知っていれば大丈夫っすよ。実践では相手を選べないっすから。」

「それは、ジンロ、お前ならな。でも、ルールのある競技だろ？相手の目をつぶすわけにもいかないし、肘打ちですら反則なんだろう？」

「もちろん、格闘技で体の大きさはそれだけで武器になるっす。けど、そんな技を使わなくても、多分アドは勝てますよ。しっかり、相手を研究してきているんすよ。奴は。陛下の勉強にもなると思うっす。」

「ルーって呼べよ。」



へへ、と笑う灰色の髪の新口。彼は、新口の白兵戦の先生なのだ。とても、強い。

金髪の青年、新口は、町に出ると、ファルム・シ・デアストルという偽名を使っている。通称「ルー」。カラーレンズで黒く変えた瞳は、青年のやさしげな大きな瞳を、さらに大きく見せる。笑うと大きい口は、なんともいえない愛嬌を感じさせる。蒼い瞳を黒くし、金色の髪を、少しくしゃくしゃつとみだれさせ、金色の眉を茶色に変える。それだけで、だれも彼を太陽帝国皇帝とは気付かない。

ゴングが鳴った。

ルツシーニは、強靱で大きな体を自由に使って、アドに詰め寄る。正確で鋭いジャブが、アドを下がらせる。ボクシング出身のルツシーニは、力のあるフックと、鋭い右ストレートを武器にしている。連打を浴びれば、アドはガードの上からでも重大なダメージを受けてしまいそうだ。

「アド、危ない！右、右によけるよ！」

次第に、試合に夢中になっていく青年を、新口は嬉しそうに見つめる。白兵戦の基本を彼に教え初めて、二年目。確実に、成長している。

「なあ、新口！アドはなんで、右に回らないんだ？ルツシーニの得意の右ストレートをよける為には、常に左前の構えで、右回りでけん制しなくちゃ。」

「そうっすね。まっすぐ後ろに下がると危ない。そのうち捕まりますよ。」

一ラウンド目は十分。既に、五分を過ぎ、このままでは、撃たれつづけているアドが不利だ。ダウンをしなくても、判定で負けてしまう。

「アドは、空手出身なんで。そのうち、蹴りを出します。」

「なあ、この試合のルールって、投げとか締め技とかありだろ？なんで、そうしないんだ？アド、締めわざとか得意だよな？」

瞳は、リングを見つめたままの青年が、新口に問い掛ける。

「アドは、地味な技を嫌うんで。」

「地味？それはそれでかつこいと思うけどな！」

その時、後ろに下がっていたアドが、不意に半身、右にすべるように動いた。

「あ！」

ルツシー二の左フックを身をかがめてよけると、そのまま後ろ回し蹴りで敵の左ひざ裏を捉えた。

膝を突いた元王者。観客のどよめき。

すかさず、背後から締め技を決める。

赤い顔の、ルツシー二が、アドのうでに、タップする。

歓声が、うねるように沸きあがる。

花火の音、打ち鳴らされるゴングの音。シンカの声すら、ジンロに届かない。

「最年少の王座に、また一步近づきました！アド・エトロ！今だ成長しつづけるその体と強さは、どこまで行くのか！前王者を下しました！」

実況の興奮した声が、シンカの胸をさらに熱くさせた。

「ルー。そろそろ時間っすよ。」

ジンロに引つ張られながら、スタジアムを後にする。

「これから、仕事っすか？」

興奮して話しつづけるシンカに、つまらないことをジンロが聞く。

青年は、肩を落とした。

「いったんミンクに、今日の感想を聞いて、それから、明日からの視察の打ち合わせ。」

「・・・大丈夫っすか？もう、二十二時を過ぎてるっすよ。」

「うん。でも、アシラが、この時間でないと空いていないって言うから。彼のほうがずっと忙しい。遅刻はできないな！走るぞ！ジンロ！」

「待ってくださいよ。」

政府ビルでは決して見せない、楽しげな笑顔を、自分だけが見てい  
るという、不思議な満足感を感じながら、ジノ口は青年の後に続い  
た。

## 1・新しい季節3

中央政府ビルの特別車両ゲートからシンロの車で戻ると、シンカは専用のエレベーターに乗り込んだ。百五十階まではあつという間だ。

シンカは瞳のレンズを外し髪を整え、眉の化粧を取る。手馴れたもので約一分後にエントランスに到着したときにはいつもの彼に帰っている。

扉が開くとちょうど秘書のユージン・ロートシルトと鉢合わせした。

「！陛下！」

「！ユージン。今帰りなのか？」

どきりとする。出かけるときに声をかけていないのだ。

「陛下、お帰りのところ申し訳ありませんが、一つ決裁をいただきたい案件が届いております。急ぎということで、南星環境省の方がお持ちになりました。」

ユージンは、再び彼女のオフィスに戻ろうとする。

この時間まで仕事をして疲れているのだろうに、きつちりした姿は朝見かけるその美しい姿と何も変わらない。亜麻色の髪をキチンと結って清楚な曲線を描く眉、派手ではないが印象的な瞳は、秘書官として一片の非もない。年齢は確か二十七歳くらいだったと記憶している。

そのあたりは友人のシキのほう詳しくくらいだ。

太陽帝国皇帝付きの若き主任秘書官ユージン・ロートシルトといえば、ブルブルで知らないものはないくらいのセレブリティだそ

うで、女性の憧れになっているのだ。

ミンクも憧れていると言っていたかな。

「執務室にお持ちいたします。」

振り向いて、にっこり笑う。

「いいよ。ここで。」

シンカは、ユージンについて秘書のオフィスに入る。

書類に目を通す間、ユージンはじつと皇帝を見つめている。

「いつも、こんなに遅いのか？」

ユージンのデスクのコンピュータでファイルを展開して報告書を読みながら、シンカが尋ねる。

その蒼い瞳をユージンは瞬きもせず受け止める。

「いいえ。今日は陛下がお出かけのようでしたので、アシラさまとのお約束の時間までと思ひまして。」

シンカがそつと抜け出していることを彼女は知っている。それでいて特段騒ぐこともなく、さりげなくフォローしているのだ。

そんな風に仕事に取り組める姿勢は素晴らしいと思うが、夜遊びしてきたシンカにとってはちくりと罪悪感だ。可能なら放っておいて欲しい。

「ユージン、こういう日は帰っていいんだから。俺に合わせることはないんだ。」

傍らに立つ女性を見上げる。

「いいえ。陛下がお仕事なさっている時間には常におそばにおります。それが秘書官の務めですから。それに私、陛下のおそばにいられる事が誇らしいのです。」

少し面映い。シンカは視線を逸らす。

「……俺はあなたが理想と思う皇帝になれているのかな。」  
「はい。」

ユージンの穏かな視線にさらされて、こんな会話をしていることに耐えられなくなってくる。照れることすらできない。

沈黙がシンカには重い。

横を見れば、ユージンが微笑む。

意味もなく鼓動が早まる。

シンカはなんとか報告書を理解して、コメントとサインを入れた。

星間通信の整備できていない惑星への開発計画に五年の期限を切つて、シンカはその理由と今後のスケジュールを提出する指示とを書き込む。

サインとリングにある印璽を入れ込むと、決裁済みファイルとしてフィックスした。そうして誰も変更できないファイルにしてから担当に戻すのだ。こうすることで、シンカ自身が判断し決裁した書類は内容をたがえることなく、政策に生かされる。

「それじゃ、後よろしく。」

シンカは立ち上がって、秘書室を出る。

振り返れば、ユージンはまだ深く頭を下げていた。

「なあ、ユージン。もう遅いんだからちゃんと公用車で帰れよ。」

驚いて顔を上げた秘書官は目を丸くして、そう、少女のように頬を赤くした。少しばかり完璧な表情を崩させたことが面白くてシンカは笑った。

運転手つきの公用車で帰るように指示して、若い皇帝は執務室に入っていく。

その、後姿を見送りながら、美しい秘書は自分の胸の鼓動を聞いていた。

たった一回、目を通しただけの長い報告書に、担当者の納得できるように意見と展望を盛り込んで、的確な判断を下す。

こんな素晴らしい素質を持った人物は大臣クラスにもそうはいない。彼女はそう思う。

金髪の青年の真っ直ぐな蒼い瞳に、彼女は恋をしていた。

皇帝は決して私のプライベートな部分に立ち入らない。その気遣いは、大切にされていると感じることができる。でも……もう少し、近づけたら。

小さく、ため息をつく。

中央政府ビルの最上階。洗ったばかりの銀色の髪を拭きながら、少女はふんと頬を膨らませた。

「遅いんだから！ 会議会議って、私の話聞いてくれないの？」

「ごめん。」

満面のやさしい笑みで謝られると、ミンクのほおの風船はすぐにしぼむ。

「な、どうだった？ 俺、学校って一度も行ったことないからさ、想像つかなくて。」

肩に手を回しながら、ソファアに座らせる。

「あのね、私もどきどきしちゃった。説明会場の外でね、先輩がたくさんいて、いろんなサークルに勧誘しているの。」

「サークル？」

「うん。スポーツのとか、乗馬とか、文学研究会とか、なんだかたくさんあって。講義の後に、週に一回とかそういう活動をするんだって。講義の内容もね、自分で選択したものを受けられるから、まず、今学期になにを受けるのか、決めなきゃいけないの。」

「へえ。面白そうだな。ミンクは、なにを受けるんだ？」

「まだ、これから考える。来週から正規の授業なのね。それまでは、いろいろ見て回れるんだ。説明会であつた、同じ学部の女の子と仲良しになったから、その子と回ろつかと思ってるの。」

「どんな子？」

「ちようどね、このビルの四階で働いている人の娘さんで、私も、同じように政府ビルにお勤めしている人の子供って言っちゃった。」

少女は小さく舌を出す。

シンカは蒼い瞳を細める。先ほどのユージンとは全然違う。ほっとできる。

仕事柄たくさん仕事のできる女性に出会ったが、ミンクにはそんな風になつて欲しくなかった。彼女たちがいやだというわけではないが、生きることストレスと達成感と目的を持っている彼女たちは、自分の理想の枠に入り込んで常に完璧な様子を見せる。

先ほどのユージンを思う。

彼女が俺に特別な感情を抱いていることは感じている。

けれど、仕事柄そばにいられることで満足している。先ほどのようにどんな人間でもわかるくらい態度に出しているのに、本人は仕事だからと言い訳する。



はつきりと表に出されないために避けることも断ることもできずにいる。その態度を無視できないシンカにとっては、つらい。

ミンクの素直な言葉を聞いていると安心する。からかえば怒り、抱きしめれば照れる。その素直さは愛しいと思える。

「瞳の色とか変える必要はないと思うけど、大丈夫か？」

「うん。遠い惑星の出身ってことにしてあるもの。これは本当だし、大丈夫。私はシンカと違って、あんまり表に出てないから。テレビとかに映るわけじゃないし。彼女ね、ブルブルの一番有名な進学校から、来たんだって。すごい、しっかりしてるの。」

「かわいい？」

「シンカ？」

睨むミンクに吹き出す。

「冗談だつて。今日のミンク、いつもよりいい感じだよ。やっぱり、行くことにしてよかったな。」

「うん。ありがとう！」

青年に額の髪をなでられて、少し頬を赤くするミンク。シンカはよく、こうして額に触れたがる。それがミンクにどんな気持ちを起こさせるかはあまりシンカは気にしていないようだ。

「今日は、早く寝ろよ。俺、これからアシラと打ち合わせがあるんだ。」

甘い気持ちにさせておいてこれなのだから、ミンクも口を尖らせる。

「えー、これから？」

「アシラも忙しいんだ。ごめんな。ちゃんと髪を乾かして、すぐに寝るんだぞ。」

シンカは少し熱っぽいミンクの額に軽く唇を当てて、抱きしめた。

無理させてもいけない。ミンクは、体が弱い。

毎日授業があるようになると、今までより忙しくなるはずだ。注意して見ていてあげないといけないな。

生まれたときから、そばにいた。唯一、俺と同じ故郷、デイラの記憶を持つミンク。彼女を失うことはできない。  
大切に、大切に守る。

## 2・地下街

2

大学の構内には色とりどりの紅葉が降り注ぐ。構内のいたるところに植えられている大きなポプラからは大きな葉が、ニレの木からは小さな黄色い丸い葉が散る。校舎の白い大理石の建物と紅く色づいた木々の美しい景色を見上げながら、少女は朝の空気を吸い込む。今日もミンクは一時間も鏡の前でファッションショーを繰り広げた結果、判断してくれるシンカが視察で出かけているので、不安ながらも紹介されたスタイリストに選ばれた服を着ている。

このルール・ス・ウェッス大学は太陽帝国の特権階級の、いわゆるセレブリティが通う。ミンクの安全を考えればそうならざるをえない。大学側も皇帝自らの頼みを快く引き受けてくれた。密かに静かに、この特別な少女を見守っている。

そんな暖かい手に包まれていることも気付かずに、少女は大きく伸びをする。

「おはよう！」

アレクトラだ。

ブルネットの髪を美しく巻き、細身で背の高い彼女は、ミンクにとってはちよつとうらやましい容姿をしていた。小柄で背の低いミンクは昔から背の高い女性に憧れを持っている。

「おはよう！」

「ミンク、その服。」

え？可笑しかったかな、と自分を眺め、それからミンクはアレクト

ラを見上げた。

「今年の秋のコレクションで見たわ！ファン・ジ・ニートの新作ワ  
ンピじゃない！」

「ええと。そうなの？人に選んでもらったから、よく分からないん  
だけど。」

「やっぱり素敵ねー。」

ミンクの体格に合わせて選ばれる服は、たいていこのブランドらし  
い。自分で服を買いにいけないミンクにとっては他の少女が見につ  
けているような服も着てみたいと思っているのだが。

「あたしチビだから、これしか似合わないって言われたの。」

「そんなことないわよ！だってこれ、お直してもらってるんでき  
よ。すごいな！いいな。私のうちはそこまで余裕ないからなあ。」

「アレクトラのほうがとつてもきれいよ。」

無邪気に笑う、銀色の髪少女を見つめながら、アレクトラは思う。

（こんな、高価な服をここまでお直するって、ほとんどオーダー  
メイドよね。ファン・ジ・ニートのオーダーメイドって言ったらパ  
パのお給料の一月分はかっちゃうのに。ミンクはおんなじ政府  
ビルにお父さまがお勤めしていると言ってたけど、大臣クラスとか  
なのかな？いいなあ。私もお金持ちに生まれたかった。）

自分自身も十分恵まれているということに、気付いていない。

「あ！見て、皇帝陛下よ！」

「え？」

ミンクは意味もなく慌てた。周囲を見回し、「あれよ、あれ！」と  
笑われて初めてアレクトラの指差すほうを見る。カフェテラスの店

頭のスクリーンに朝のニュースが放映されていた。  
今日は視察だと言っていた。  
取材もあつたんだな。

「すてきねえ！」

既に、学生が集まって眺めている。ほとんどが女性だ。

「ふうん。」

ミンクはどういう表情をしていいか分からない。照れるような、恥ずかしいような。

スクリーンのシンカが、記者の質問に微笑む。

「キヤー。」

「かわいいのよね。あの笑顔が。」  
少女たちにどよめきが広がる。

かわいい？シンカが？

……私そんなこと考えたこともなかったな。

ミンクはボーっといつものシンカではないような彼を見つめる。さすがに部屋であくびしてたりする姿とは違う。きっちり正装しているので少し大人びて見えるな。

「ミンク？顔赤いわよ。」

アレクトラのブルーの瞳が笑う。

「え、そうかな？」

「ミンクもファンなの？」

「えっと、大好きなの。」

少女の表現に噴出すアレクトラ。

「ミンク、かわいい！あのね、お父様がね、この間、庁舎内でお会いしたんだって！」

「えー、いいなあ！」

アレクトラの言葉に周りの少女が振り向く。

「あ、もう、終わっちゃった。」

ニユースが新しい惑星の環境説明などになると少女たちの興味も移っていく。

「ミンクのお父様って、どの課にいらっしゃるの？」

アレクトラはミンクを見つめるとき、どうしても見下ろす感じになる。そのしぐさが少し流し目みたいで綺麗だとミンクは思う。

「えと、よく分からないんだけど、軍務官の部下なの。」

「本当？」

「うん。」

それは友人シキのことだ。早くこの話題から開放されたい。

小さくため息をつく。シンカにちょうどいい仮の家族を設定してもらおう。私じゃ、政府の組織はよく分からないし。

## 2・地下街2

二日目の、視察を終え地球に戻ると、シンカはたまっていた書類をさつさと片付けて、ナンドウへ向かうことにしていた。

時刻は二十時。急げば、今日中にナンドウまでいける。

「ねえ、シンカ。」

執務室に、パジャマのまま現れたミンクは、そうつと覗き込む。

「どうした？」

あせりつつも、ミンクの顔色や表情を確認してしまう。昼間会う時間が減っているから、どんな短い時間でも、きちんと見つめていようと思う。

「お願いがあるの。私ね、大学で自分の家族のことどうお話していか分らないの。成り行きでお父さんがレクトの部下ってことになっちゃったんだけど、それでよかったかな？」

「くす。」

ミンクにとっては、とても重要なことなんだな。

「じゃあ、いつもはこの百二十階にいる、軍務補佐官にしておけよ。レクトがミストレイアから引つ張ってきた人物なんだけど、政府の職員にはあまり知られていない人だし、普段はレクトと行動していて、職員同士の付き合いに参加するようなタイプでもないし。マイクレア・ロッシ補佐官だ。」

「いいの？」

「レクトに頼んでおくよ。」

「それからね、シンカのこと、いっちゃだめ？」

うつむいて、上目遣いで見上げるミンク。赤い瞳がくりりと瞬く。

「え？」

「男の子達が付き合っている人がいるのかって聞いてくるの。」  
「若い皇帝はほつとしたように笑顔になる。」

「一緒に住んでるって言つとけよ。」

はつきりしておいたほうが、余計な虫がつかなくていい。

「えー。恥ずかしい！」

ミンクは頬を赤くしている。少し、シンカはむっとする。俺と一緒にいることが恥ずかしいことか？

「だから、いるとだけ言っておけば、うるさくなくていいと思うよ。どんな奴かは言わなくていいんだから。」

「別に、うるさいわけじゃないけど・・・。」ブツブツ言っている。

ミンクが、この話題を出した意図をシンカは図りかねた。

「いいよ、お前の好きにしろよ。隠したければ隠せばいいし。」  
少し冷たい言い方になる。

「俺、忙しいんだ。悪いけど、一人にしてくれないか。」

「もう。忙しすぎだよ！シンカ、体調崩しちゃうよ！」  
頬を膨らます。

「ミンク。」

シンカは眉をよせて、恐い顔をする。

「そんな顔したって、平気だもん。シンカももっと自由にしたらいいのに！わたしね、大学行くようになって、自分が今までのく自由じゃなかったことに気付いたの。いつどこにいてもよくて、何しなくてもいいの。そんなの、リユードではあたりまえだったけど、ここに来てからずっと、我慢してたの。私一人自由になっちゃってシンカが可哀相なんだもん！シンカももっと、自由な時間を作るべきだよ！」

シンカは、視線をそらした。

（ミンクはやっぱ、窮屈な思いをしていたんだな。）

改めて、すまない気持ちになる。彼女は知らなかったが、俺が皇帝に即位したとき、ミンクをここではなく、友人のセイ・リンの家に預けるという案もあった。そのほうが、彼女によいのではと。それを、俺が、反対した。そばに、いて欲しかった。

シンカは、手元のコンピュータのスクリーンに視線を落とす。そ



の金色の長いまつげが、ミンクはうらやましい。真剣に話しているのに、こちらをちゃんと見てくれない。そんなことにも苛立つ。

少女はその苛立ちの原因が、自分の体調不良にあることに気付かない。内臓の弱いミンクは、無理をすると熱が出る。微熱くらいでは自覚はないが、むずかる子供のように苛立つのだ。

「ミンク、俺は好きでやってるんだ。あんまり邪魔すると、本気で怒るぞ。」

「知らない！」

ミンクは怒って、執務室から飛び出していく。

青年は小さくため息をつく。ここに、いること自体が、彼女の負担になっているのか……。俺の姿を見ていると、心配になるんだろ。政府の職員にも気を使う。

セイ・リンに預けるべきか……。

一つ首を振って、青年は考えたくないことを隅に追いやった。時間がない。

ナンドウ、通称仏心街。

暗く、寂れた街は、人通りも少ない。

シンカは、乗ってきたバイクを地下に停めた。

## 2・地下街3

彼がこの町、いや、このブルブルで移動するために取る手段は電気原動機二輪小型車、バイクだ。300ccの排気量のモーターサイクルはスポーツ仕様で、平らでない場所でもかなり走れる。ある地下街で手に入れたそれは認識番号もなく、免許証もいらない。もちろん地上で走れば帝国警備兵に捕まる代物だ。

自家用小型飛行艇、ブルブルで言う『車』を所有するには認識番号の登録が必要だ。個人を特定するその番号は残念ながらシンカにはない。もちろん免許証もない。だから、少し不便ではあるが、誰にも知られずに移動するにはこのバイクが一番いいのだ。

今は廃線になっっている地下鉄道の線路跡を走る。それは地図にない網の目を地下街のさらに地下深くに広げている。

整備されていないため、所々キケンな箇所もあるが、シンカにはほかにとる方法はない。公共交通機関は地下街にはない。

湿り気の多い地下鉄道跡を出るとシンカは一つ息を吸った。

地下街は大体そうだが、昼夜を再現する公共光源を何度修復しても悪戯で壊されてしまう。だから昼間も夜もなく、いつも薄暗い。空気を浄化する機械のある建物だけは、厳重に守っている。これが、もし、悪用されたらこの地下街すべてに悪影響が出る。前皇帝の時代に一度、この街の空気浄化装置を破壊したレジスタンスがいた。全市民の緊急避難、それに乗じた暴動。その事件のために地下街は地上の人間に嫌われ、そしてこの街の名前は地に落ちた。最悪の街と。

今、この街の再開発計画が持ち上がっている。

そのまま、汚点として残すべきだという意見もある。

だから、見てみたい。

青年は、黒いシャツに皮のブルゾン。ルーズな黒いパンツ。足元は特殊なブーツを履いている。瞳には暗視ゴーグル。腰には短い軍用のナイフ。実はこの装備は、ここで身を守るためのものでなく、誰にも気付かれることなく政府ビルのセキュリティをごまかして抜け出すためのものだ。

「お兄さん。」

声をかけてくる女性がいる。

まだ、若い。シンカと同じくらいか、もう少し年下。

「四フランでどう？」

そう言つて深く開いた胸元を強調し、シンカの手を両手でつかむ。

「いない。」

そつけなく言つて、手をそつと離す。

背後に気配を感じて膝を落とす。

その瞬間、後ろから羽交い絞めにしようとしていた男が空をつかんだ。

シンカは立ち上がりざまに肘でそいつの脇を打つ。

「ちっ」

腹を押さえながら逃げていく。

「そのリング。」

先ほどの少女が、シンカの手首をつかもうとする。勢いでシンカは飛び下がった。

「上からきたの？」

上とは地上のことだ。シンカの手首にはめられている黒く鈍く光る腕輪、リングと呼ばれているが、これは身分証明と財布を兼ねている。それを付けることができるのは、地上の特権階級だけだといったいのだろう。

シンカのそれは、そのまま皇帝の証でもあるため、通常のものよりいろいろな機能を備えている。指にはめたリングで操作すると灯りになったり、低出力のレーザーを出すこともできる。護身用にもな

っているのだ。

「ねえ、私に少し恵んで。」

追いすがる少女を残し、走り去る。

リングは目立つ。しかし、これだけは外すことができない。これを外すと自動的にセキュリティーに連絡が入ってしまうのだ。シンカは、シャツのすそを破ってリングの上から縛った。

路上で、その様子をじつとみつめる五歳くらいの子供。

彼には片足がなかった。路地に腰を下ろし、一つだけの膝を抱えている。

汚れた大きすぎるシャツを頭からかぶって、暖を取っているのか。鼻をすすする。

黒い大きな瞳が、じつとシンカの手首を見つめていた。

「お前、親は？」

しゃがんで子供の視線に合わせると、シンカは聞いた。

「おれ、ひとり。」

一人と発音できていない。

「お兄さん、お金ちょうだい。」

「おなかすいてる。」

その言葉だけ妙にきれいな発音で、言いなれているせりふのように聞こえる。

「だめだよ。」

シンカが首を振ったとき、少年の手に握られていた何かが頬をかすめた。

驚いて立ち上がる。

子供の手には酒のビンだろうか、割れた破片が握られている。握り締める手が血でにじもうと子供は気にせず、シンカにそれを振りかざす。護身のつもりだろう。

ああ、そうか。

子供の立つ路地のおくで、女のあえぐ声が聞こえる。娼婦の母親を待っているんだ。だから、こんな時間に子供が一人でいる。

子供の頭を押さえて止めていたシンカに、かなわないことを悟ったのか子供が大声で泣き始めた。

だが、注目する人はいない。

母親ですら顔も見せない。

「それ、よこせよ。」

子供の手のガラス片を取り上げ、さつき手首に巻いたばかりの布で縛ってやる。子供は泣き止み、少し不思議そうな顔をして青年を見上げる。それでも、リングを取ろうと小さな手でシンカの手首にすがる。不意にリングがピカツと光った。

「うわっ！」子供は驚いて座り込んだ。

シンカが点灯させたのだ。小さく笑うと、立ち上がり、目指す建物に向かう。

そこは、この薄暗い深夜の地下街で、唯一といっていいほど明るい照明がたかれている。

表に薄汚れた看板が、傾いてついている。アドのジムだ。以前はアドに教えてくれた人のジムだったらしいが、アドのファイトマネーを持ってどこかに消えた。今は、彼が練習場としてい使用している。彼を慕う数人を教えてもいるという。

ヤニで曇った窓をのぞくと、数人の男たちに囲まれて、アドがいた。頭一つ、周りより大きい。

戸口の脇にもたれて、取り巻きがなくなるのを待つ。

一人、二人とジムを出て行く。

明かりが消えて、最後にアドが戸口を出ると鍵を閉めた。

やっぱり、大きいな。

シンカは目の前にあの試合の主が居ると思うと、嬉しくなってしまう。

「エトロさん。」

シンカが声をかける。アドは視線を向けもせずに言った。

「上の人間が、ここまで来るのは珍しいな。」

「僕、『ジエッツ』誌のものです。お話を伺いたくて。」

歩みを止めない、大柄な男に、歩みを合わせる。

横に並ぶと、シンカの視線はアドの胸の高さだ。アドは、こちらをちらりとも見ないで早足で歩く。

「ここまで来るのは感心だが、どうなってもしらねえぞ。」

## 2・地下街4

「大丈夫ですよ。エトロさん、決勝進出おめでとございます。」  
「ああ。」

「次号の特集で、地下街について掲載の予定なんです。この街にも、再開発の話がありますが、どうお考えですか？」

「そんなこと、俺に聞くことじゃねえだろ。」

ちらりと、シンカを上から睨んだ。

「エトロさん、ご自身もこの街で大変な思いをされてきていますよね。」

「お前、名前は？」

アドが、立ち止まった。

「僕、ファルム・シ・デアストル。ルーって呼んでください。」

ゴースルを取って、にっこり笑う青年を、アドは改めて睨みつけた。

（なんだ、子供じゃないか。事あるごとに俺の生い立ちやら子供時代やらの悲劇を聞きたがる。美談に仕立てるたり、こきおろしたり、様々だ。この特権階級のお坊ちやまもそういう類か。）

「この街が好きですか？」

アドは、青年の金色の髪をつかんだ。

ぐいと押さえつけると青年は仰ぎ見る形になってよろめく。大きな目でアドを見ている。表情は変わらない。

「お前、馬鹿か？」

「この街の再開発をPRしていただけることを条件に、あなたに援助したいというスポンサーがあるんですが。」

アドの大きな手をゆっくり、額から離すとシンカはにっこり笑った。

「スポンサーなら、ある。」

大男は再び前を見て歩き始めた。

「本当に、今のでいいのか、考えてみたほうがいいですよ。俺は、反対です。」

「お前、なにを知ってる！」

つかみかかるアドの手を、するりとかわして、離れる。アドが一歩前に出れば、一歩下がる。

アドは気付いた。

（こいつ、間の取り方を知っている。何か格闘技をかじったのか。）

「アド、迦葉<sup>かしやう</sup>はよくないよ。」

若き格闘家が目を見開いた。淡いグリーンの瞳に、試合のときのような火が点る。

無言のまま、本気の後ろ回しげり。

シンカは身を沈めてよける。

すばやい膝蹴りがシンカの腹に入る。両手でかろうじてガードしたものの、勢いで後ろに吹っ飛ぶ。

転がりざまに路上の消火栓にぶつかる。

「つて。」

したたか、二の腕を打って、シンカは目の前の大男を見上げた。

「お前、なにを知っているのか知らないが、滅多なことというなよ。痛い目見たくなかったら、さっさと上に帰れよ。」

「さすがだな。かなわないや。」

腕を押さえたまま、金髪の青年は立ち上がる。



「あんたは、この街の誰より、いい目をしていると思うんだ。だから、迦葉からは手を引いてほしいんだ。」

迦葉。それは、ブルブルの地下組織の名だ。各地のレジスタンスを操り、暴動を起しかけたこともある。その正体は分かっているが、資金が潤沢な様子から、特権階級の何がしかの力がかかっていると思われる。危険な組織だ。レクトも手を焼いている。

この街に、迦葉の匂いがあるために、ジンロは連れてきてくれないのだ。シンカには分かっていた。

「お前には関係ない。」

「そんなことないよ。俺は、あんたに必要なスポンサーをつけることができる。今、あんたはこの街の子供たちの憧れだ。何の躊躇もなく大人にナイフを突きつける子供でも、あんたには微笑むんだ。そんな才能を、援助するところはいくらでもある。俺はそれを知ってる。このまま、あんたが迦葉に使われたら、どんなことになるかも。放っておけないんだ。俺、あんたのファイト、好きだし。」

アドは、目の前の青年を見つめる。

（なんだ、こいつ。傷一つないきれいな顔して、まだ、十六、七歳か。こんな子供がどうして、迦葉のことをそんなふうに話す？）

「お前みたいな子供を信用できるか。」  
背を向ける若き格闘家。

「また、来るよ！俺の名前、ルーだ。覚えておいてくれよ！」  
シンカは大きな背に声をかけた。

そろそろ戻らないと夜が明けてしまう。  
少しまだ腫れている腕をさすりながら、シンカは帰りを急いだ。

こんなとき、この体質はとても便利だ。たいていの怪我はすぐに治る。痛みだけはしばらく残るが、政府の誰かにばれる心配もない。

シンカはその体内に「ユニイラ」という植物の成分をもっている。  
ユニイラは、惑星リユードにのみ存在し、リユードの住人には傷薬や大気ของ毒素から体を守る薬として使用されていた。免疫に対して何らかの効果があるらしく、現在でも帝国研究所で研究が続けられている。

シンカはその遺伝子を組み込まれて生まれている。半分植物の性質を備えていて、血液中にユニイラを持っているからすぐに治る。  
人ではない、という見方もある。そうかもしれない。

目の前ですっと消える擦り傷を見れば、本人ですらそう思う。たまたま、こうして普通の人間のように生きているが、今後どうなるかなんて研究者もシンカ本人も知らない。

彼を生み出した母親が亡くなった一年前には、シンカにはミンク以外、何も残されていなかった。

けれど今は違う。仲間がいて、大切な物事がたくさんある。やるべきことが、彼を必要とすることが。

だから少しくらい大変だろうと、眠る時間がなかりうと大丈夫。

そつと、静まり返った政府ビル内を歩く。最上階の部屋に入ると、ちょうど、朝日が執務室に差し込んだ。彼が皇帝になることを決めたときにも、こんな蒼く白い光を浴びた。

カラーレンズを外すと、ぎゅつと強く目をつぶる。  
開いた瞳には、深く蒼い光がたたえられている。

### 3・ミンク

ピピ、ピピ。

耳に痛い音。

銀色の髪が頬に落ちるのを感じながら少女は寝返りをうつ。

隣に青年の姿はない。

そのまま無造作に手を伸ばして、目覚ましを止めると大きな伸びをする。

また朝早く出勤したのかな。

昨夜のイライラを思い出す。

早朝、多分シンカが出かける前にキスしてくれたのだろう、ふんわりとしたユニラの香りの記憶がある。彼の体内のユニラは独特な甘い香りをしていて、抱きしめられたりすると香る。

「また、寝てないのかな。」

ポツリと、つぶやく。

枕が冷たいのでなんとなく分かる。

そのひんやりした感触に頬を当て、ため息をつく。

シンカが私を大切にしてくれる分、私だって大切にしたいのに。心配なのに。

「もうっ！」

枕に八つ当たりしても仕方ない。起き上がると今日のことを考える。大学で受ける講義は四つ、夕方「惑星の歴史」研究会のサークルにも見学に行くつもりだ。

ミンクが大学に通うようになって、一番楽しいのは昼食の時間だった。仲良しになった女の子たち四人とカフェテリアで好きなものを食べる。おしゃべりする。

みんなはミンクの知らないことをたくさん知っている。流行の音楽や俳優、大学の先輩のこと、恋愛の事。ミンクはつい二年前まで自分の住む惑星以外に宇宙があり惑星があり、そこに違う種類の人がいるなど知りもしなかった。

このどうしようもなく足りない知識はおっとりした話し方とともに好評なようだ。世間知らずのお嬢様というレッテルは便利だ。反論してかんぐられることを思えば、それはそれでいい。

今日もランチの Pasta をほお張るミンクを、アレクトラがからかう。

「ねえ、ミンクの彼、どんな人なの？教えてよ。」

「いいなあ！」

同じ講義をとることにしたシェデスルースもジュースを飲みながらミンクを見つめる。

少しむせながら、ミンクは頬を紅くする。

「私、てつきりミンクは奥手だと思ってた。だって、すごいお嬢様だし、世間知らずだし」

ミンクの銀の髪に触れるアレクトラ。

「そんなことないよ」

「それって、奥手じゃないってこと？」

「え？」

「キヤー。可愛い顔して、案外経験豊富だったりして。語ってよ、語って！どんな人と付き合ってきたの？」

「もう！ないってばそんなの」

サラダのリーフをつつきながら、ミンクは口を尖らす。

口に入れようとしたそれを横から伸びた手がミンクの手ごと奪う。

「キヤー！やだ、先輩」

シェデスが面白そうに笑い転げる。

サラダを食べられて、ミンクは大きな瞳をさらに大きくさせて、淡い金髪の青年を見つめた。すぐ背後に立った青年は気持ち悪いくらい近い。

「もう一口」

ミンクの肩に手をおき、右手は白い小さな手とフォークをつかんだまま、青年はサラダをつまむ。先輩、クーナ・キトラ・ベルの顔が間近にあった。

「やだ、クーナ先輩」

ミンクが顔をしかめるとするりとさりげなく距離をとり笑う。

「アレクトラ、今日の歓迎会、来てくれるんだろ？みんな、期待してるからさ」

涼やかな笑みを浮かべる青年にアレクトラは頬を染めて頷いている。ミンクはこの先輩が苦手だった。

シンカより一回り大きい体格、高い鼻、笑うと必ずウインクになるくせ。誰にでもなれなれしく触れる態度。

緊張感のないすべてが見ていて落ち着かない。信頼できない気がしていた。

アレクトラは初めて会ったときからこの先輩のことを気に入っている。恋しているのかもしれない。ミンクにはその趣味はよく分からない。

夕方からのサークルの見学に一抹の不安を覚える。アレクトラに誘われてこの先輩のいるサークルにも顔を出す予定なのだ。クーナは去り際にまたウインクしてみせる。喜ぶ女の子たち。

ミンクは手に持ったままのフォークをそつと置いた。先輩が口をつけたそれ。食べる気分ではなくなった。

夕刻、日差しはまだ高いが、午後の講義が終わったために時間をもてあました学生たちが中庭やカフェテリア、隙間さえあれば座り話し込んでいる。

そんな中を縫うように、ミンクとアレクトラは駐車スペースに急ぐ。大学構内は車の乗り入れを禁じられているために、敷地の外れに学生専用の駐車スペースがある。クーナ先輩の車もそこに置かれていた。数台に分かれて目的の会場へと向かうらしい。

「先輩、どこに行くんですか」  
アレクトラが後ろのシートから尋ねる。

車は音もなく静かに道路を進む。新入生の歓迎会だとかで、大学の外へ向かっている。

ミンクは耳を濟ませながらも流れる街路樹の紅葉に目を奪われる。  
「今日はちよつと特別なんだ。滅多に行けないところに案内してやるよ。」

クーナは運転しながら、後ろに小さくウインクする。  
車はふつと高度を上げ、最上層の高速に乗る。

空を飛ぶ車、自家用小型飛行艇は、地上十五メートルから五メートル間隔で決められた三層の路線に沿って走る。上に行くほど高速で、つまり、遠くへ行くのにはこの第三層に乗るのだ。

急に風景が早く流れるようになって、ミンクは見ているのがつらくなる。前を見る。助手席のもう一人の先輩スード・キエラが、飲み

物をくれた。

「ありがとう。」

につこり笑うミンク。口数の少ないこの先輩はいい人だとミンクは思う。

ミンクの笑みに少し照れたように視線をそらし、座りなおすとクーナに小さく肘で疲れてからかわれていた。

「ねえ、先輩、ここ、地下街じゃない？」

空挺の動きに、アレクトラが緊張した声を出した。

「え？地下街？」

ミンクも外を見る。

「大丈夫だよ。俺たちよくくるんだぜ。知り合いがいるんだ。」  
自慢下に、クーナ先輩が笑った。

後ろについてくる、お友達の車を確認して、ミンクは、不安な気持ちを押さえつける。

「初めてだろ？」

不安そうなミンクに気付いて、クーナが声をかける。

「うん。」

「俺たちのそばを離れるなよ。」

アレクトラは、そんなせりふにも、感動しているようだ。嬉しそうに頬を赤くしている。

「はい。」

アレクトラが、元気に返事する。

案内された場所は、薄暗い、町のバー。

降り立った大学生十名ほどが、わいわいと止まらない会話とともに、静まった店に入っていく。

店内は、外見ほど暗くなく、汚くもなかった。入ると左側にくるみ材のカウンターがある。襟のあるシャツに黒い皮のベストを着た男が笑顔で迎えた。



「こんばんは。今日はまた大勢ね。」

長い金髪を腰まで伸ばした、背の高い女の人が、クーナに話し掛けた。

「この間言っただろ。新入生の歓迎会なんだ。ここは、大学の連中には刺激的だからさ。いい勉強になると思って。」

例のウイंकで返す先輩。アレクトラは感心したように店内を見渡している。

ミンクは緊張したままだ。こんなところに来たことをシンカに知られたら怒られそうだった。

惑星リユードにいたときから、こういうところで守ってくれたのは常にシンカだった。惑星リユードは未開惑星。文明のレベルも低い上、治安も悪かった。だからミンクはこういふ場所の恐さも知っている。

だって、私には何の力もない。

クーナたち大学の先輩がいざという時に頼りになるとは思えない。護身用のレーザーくらいは持っているのだろうけど、それを使うことの意味を知っているかどうか。

大学に通うのに、護身用の何かしらを持ったほうがいいかどうか迷ったミンクにシンカは言った。

「武器を持つっていうのは、それを手にしたときに覚悟が必要だよ。相手を傷つけること、自分が傷つくこと。小さなナイフ一つだって手にもてば、相手は切りつけられる事を思う。同時にお前に切りつけてもいいって考えるんだ。だから、その勇気がないなら持たないほうがいいよ。」

だから、ミンクは何も持っていない。それが、一番安全なのだと思う。

った。

先輩に促されて座る。

飲み物が出された頃、店の奥から大柄な黒いスーツの男がクーナを呼んだ。

大柄な男たち数人と何か話をしながらクーナはミンクたちのほうを指差す。その様子を見ていたミンクと、クーナの目が合った。彼は慌てて、指していた手を下ろし男たちと奥に消える。

ミンクはいやな予感がしてきた。

ミンクの正体は知らないにしろ、ここに呼ばれた女の子たちはみんな、政府関係者の子女ばかりだ。そういえば、そうだ。偶然にしては、少しおかしい。

「さ、ミンクも。乾杯よ。」

アレクトラが楽しそうに、ミンクの手に淡いピンクのカクテルの入ったグラスを持たせる。

「クーナ先輩がいないよ。」

「ほんと。どこいつちゃったんだろ。」

「俺が見てくるよ。」

正面に座っていたスード先輩が、奥に消える。

ミンクはまわりに聞こえないように、そっとアレクトラにささやく。

「ねえ、なんだか怖いよ。帰ろうよ」

「やあねえ、大丈夫よ。ほんとにお嬢様なんだから。少しは冒険もしてみなくちゃ駄目よ。」

その内容がミンクの知っている年上の女性、セイ・リンがよく言うことに似ていた。考えすぎかな、と迷う。

セイ・リンにはことあるごとに、シンカから離れて自立するようにと勧められている。自分のために生きなさい、と。そのために少し

勇気が必要なのかもしれない。  
大学に入ったのも、そんな理由があった。

### 3・ミンク2

ブルブルの中央政府ビル。

黒々とそびえるその最上階に、珍しく軍務官が立ち寄った。

太陽帝国軍の総司令でもある彼は、同時に民間の軍事会社ミストレイアの統括本部長でもある。多忙を極めるため、なかなか、シンカに会う機会はない。

それでも彼のおかげで太陽帝国軍は、脅威でなくなり、まるで、宇宙の警察のようになっていく。一方で、その網の目を抜ける仕事をするミストレイアとのバランスをどうとっているのか、本人以外分かるものはいないだろう。

長身、鋭い黒い瞳。栗色の髪はいつも短く清潔で、端正な容貌を引き立てる。若干四十二歳の彼だがその威圧感がほとんどのものを黙らせる。

宇宙最強の軍神はシンカの報告を受け、皇帝陛下が仏心街に興味を示していることを知った。その意図を確認しておく必要がある。あそこには、迦葉の支部があるのだ。下手に入り込まれても、厄介だ。くぎをさしておかねばならない。

シンカの性格を理解している彼は、シンカを縛りつけることは不可能と見て、シンカを付けることにしたのだ。シンカがレクトの命令で動いていたことをシンカは知るまい。

「ユージン。」

秘書室に声をかける。

「軍務官。こんばんは。」

主任秘書官が一人で残って仕事をしていたらしい。そのきつちり結った髪が美しい。

「また、残業か。」

レクトがユージンの肩に手を置く。

「いいえ。今夜はミンク様がお出かけですので、陛下のお助けになればと思ひまして。」

「それを、仕事っていうんじゃないのか？お前は、シンカに尽くしすぎるぞ。」

目を細めて、軍務官は若い秘書官を見つめる。

通常、この黒い切れ長の瞳、端正な顔に見つめられると女性はひるむものなのだが、このユージンだけは違っている。

それが、妙にレクトの印象に残るのだ。

「惜しいな。シンカの秘書にしておくには。」

耳元にささやこうとする軍務官を、手のひらで制して、ユージンは笑う。

「いいえ、私には、もったいないほどのお仕事です。」

「ふん。」

つまらなそうに、ユージンから離れると、レクトの表情はいつものそっけない男の顔に戻る。

「時々、お前が、その笑顔を崩すところを見てみたいと思うよ。」

につこり笑う、ユージン。

「陛下は、お部屋にいらっしやると思います。おつなぎいたしますか？」

「いや、いい。勝手に入る。」

レクトは、くわえていた煙草を、最上階のエントランスのトレイにねじ込むと、扉を開く。

「シンカ。」

この男は、皇帝陛下を呼び捨てにする。

返事はなかった。

寝室にも、執務室にも、広いフロアのどこにも皇帝の姿がないことを確認して、一つため息をつく。

あの、ユージンの検問をどうやってすり抜けているのか。

どかっと、黒い革張りのソファーに身を沈めると、再び煙草に火を

つける。

紫煙を漂わせながら、胸のポケットから取り出した電話で、ジンを呼び出した。

### 3・ミンク3

その頃、金髪をくしゃりと乱れさせた皇帝は前回同様、仏心街に来ていた。

今日も一人きりだ。一人で出かける時には誰にも、もちろん勘のいいユージンすら気付かれないように出てくる。

前回より時間が早いたため人通りもそこそこある。代わりに囲まれること数回、それでもナイフを使わずにアドのジムまでたどり着いた。閉まっている。灯りも消えていた。アドの家までの通りに行きつけの店があるらしいから、そこをのぞいて見よう。いなかったら直接アドの家に行こう。そんなことを考えてシンカは歩き出す。

ドン。

薄暗がりの中、シンカは小さな子供にぶつかった。

腰くらいまでの身長のをとっさに捕まえて支える。

黒い髪白い肌、そのグリーンの瞳は少しアドに似ている。

「いつてえな！おっさん。」

くすつと笑うシンカ。

「ごめん。」

おっさん、なんて言われたのは初めてだった。いつも大人に囲まれて子ども扱いされてきた。少し嬉しい気分だ。

少年は小さな手シンカの前に突き出した。

「慰謝料！」

「いくらだ？」

微笑んで話に乗ってみる。

「い、一フラン。」

「それじゃ、医者は診てくれないぞ。」

「え、じゃあ、十フラン。」

俺が子供の頃もこんな感じだったかも。精一杯、自分にとっての大金を口にする。

けれどそれは大人から見れば可愛らしいものなんだな。

「笑ってないで、払えよ！」

「なんに使う？」

「バズが足痛いつて言うから。：そんなこと、あんたに関係ないだろ！」

「自分のためじゃないのか？」

「俺、元気だもん。」

少年の大きな瞳を見つめる。その目は生き生きしている。けっしてそらさない。この街では、あまり見かけない。いるんだな、こういう子も。

黒い髪をくしゃつとなでて、立ち上がると、少年に言った。

「俺がバズをみてやるよ。」

「なんだよ、医者かよ。それならそうと、早く言えよな。」

シンカは、先月、太陽帝国の医師免許を取得した。薬も機材もないが、この子に、ただ金を渡すよりはましだろう、と考える。

「お前、なんていうんだ？」



「俺、リトルアド。」

「アドの知り合いか？」

「ばか、そう呼ばれてるんだ！っていうか、そう呼んでほしいんだ。」

「

胸を張って一歩前を歩く少年に、笑みがこぼれる。

シンカはふと思いついて、聞いてみた。

「お前、この街のこと好きか？」

「おう。いろいろ大変だけど、楽しいよ。」

シンカが、アドの口から聞いたかった言葉だった。

リトルアドが青年を案内したのは小さな路地の奥の診療所だった。  
小さなアルミの扉を押し開くと、すえた匂いがした。  
さび付いた看板にかろうじて診療所と読める。

こんな町でまともな医者ができるとは思えなかった。もぐりか  
もしれない。

「ここだよ」少年が案内した部屋には、白いものの混じった髭を不  
精に生やした男が、白衣らしきものを着てさびた椅子に座っていた。  
診察台にはこの間の片足の子供。

「なんだ、リトル、誰連れてきたんだ。」

男はシンカを見るなり睨みつける。酒の匂いがしていた。アルコー  
ルの類が駄目なシンカはそれだけで気分が悪くなりそうだ。この男、  
依存症か。

そう観察しながらもシンカはにっこり笑って見せた。

「僕、ルーって言います。この子に頼まれたので。」  
上着を脱ぐと、診察台の子供に目をやる。

「ここは、俺の診療所だ。よそ者は出てってもらおう。俺は上の人間を見ると反吐が出るんだ。」

男は椅子を派手に鳴らし立ち上がると、シンカを押しつけようとする。

その手をかわして男を無視すると、シンカは横たわる子供の額に手を当てる。リンパ腺を確認する。

「おい！聞いているのか！」

「一フランでいいっていったのは、それで酒が飲めるからか？」

金髪の青年は妙に迫力のある口調で、老医師のほうを見ずに尋ねる。  
「それで、キチンと診てくれるなら、なかなかいい医者だとは思っ  
けどね。」

子供は熱が高い。リンパ腺がかなり腫れていた。

「ふん、お前も医者か。お坊ちゃまが道楽で人助けなんて、泣ける  
ねえ。特別な治療でもしてくれるのか？けど、バズは助からねえよ。  
治療はできても、薬を買いねえ。」

助からない、その言葉にシンカの傍らでリトルアドが身を硬くする。

「それでも、この子を助けたいって言う奴がいるんだ。この場所を  
貸してくれると助かるんだが。あんたは、寝ていても飲んでいても  
いいからさ。」

シンカはそっとリトルアドの肩に手を置いた。

この医者もそんなに悪い奴ではないようだ。ただどうしようもなく金がない。薬も買えない。その憤りと絶望が酒に走らせるのか。それでも、ここで診療を続けるのはこの街が好きだからだろうか。

微笑んでゴーグルを外したシンカを見て、老医師は怪訝な顔をする。

「子供じゃねえか。」

「医師免許はあるよ。それに十九だ。」

「嘘つくな、どう見ても十六、七だぞ。」

反論する気にもならない。苦笑いしながら、シンカは子供の手に巻いたあの布を取ってみる。ひどく腫れてただれていた。

「あれからずっとこの布巻いてたのか？」

バズは瞳を開き、シンカを見る。少し笑った。

「俺がとったほうがいいって言ったんだけど、バズがどうしても取りたくないって言うんだ。」

リトルアドが覗き込む。

「うわ、すげえ。やっぱり、俺の言うこと聞いておけばよかったのにさ」

傷口の様子に少年は顔をしかめる。

シンカは医師に手を差し出した。

「ドクター、その酒、もらえるかな。」

「ねえよ。」

「そこにあるだろ、あんたの後ろの棚に。」

目ざとい青年に、しぶしぶ度数の高いブランデーを取り出す。

それで傷口を消毒すると、シンカはナイフを取り出す。

「どうするの？」

リトルアドが、緑の瞳を興味深そうに見開いている。

「ごめんな、これは応急処置なんだ。それより、リトル。さっきお酒でやったこと、お前できるか？」

シンカはナイフで自分の手首を切りながら言う。

「うひゃ！」

その様子に子供と老医師が痛そうな顔をした。

シンカはもちろん痛い、表情に出すほどではない。なれている。

「お前、なにするんだ。」

医師が慌てて、シンカの血を止めようと、手首をつかむ。

「まあ、見ていてくれ。」

意外なほどの力でその手を引き離すと、金髪の青年は笑った。

滴る血液を子供の傷口にたらす。

じんわりと染み込んだ血液を見て、リトルアドが口を押さえる。

腫れていた手のひらが、見る見るうちに治っていく。

「少し特殊なんだ。一時間後には熱も下がるだろう。」

「お前、何者だ？」

シンカは医師の質問には答えない。

「なあ、リトルアド。今のは、俺の血でしかできない。だから、絶対真似するな。普通の人じゃたら死んじゃうからな。お前は、バズがどこか怪我したら、お酒を使って消毒してやるんだ。バズは免疫不全になってるんだろ？」

そこで、老医師を見つめる。

「あ、ああ。母親から移されてな。」

「足を切断するまでいたって、それでも命があるんだ、あんた、相対いい腕してるんだな。これからもこの子達を頼むよ。」

握手するシンカの手首に、既に傷がないことを知って、老医師は固

まる。

「俺のことは、忘れてくれていいから。」

「俺、忘れないよ。ルー！俺、あんたが気に入った。」

につこり笑って、シンカの手を握る。

面白い子だな。

最後に、横たわるバズの手をそっと握ってやる。

この間は無表情だった子供は、なれない笑顔を浮べる。やさしくされて嬉しいのは当然なんだ。子供ならちゃんと顔に出る。心に響くそれを忘れさせてしまうこの街は、やはり現状のままでは駄目だ。改めてこの街の将来を考え直すことに決めた。

アド・エトロは、行きつけのバーにいた。

外から、ちらりとのぞく。カウンターで、プラチナブロンドの青年と話をしている。試合前だからかアドが飲んでいるのはアルコールではないようだ。さすがだな。

「ルーも、お酒買うの？」

振り向くと、リトルアドだった。

「いや、俺はアドに用があるんだ。」

「俺、医者のおっちゃんに頼まれたんだ。あ、アド！」

店の戸口に、大きな影。ぬっと、出された手が、シンカを押しつけるようにする。

「やあ。」

シンカが笑ってよけると、アドは顔をしかめた。

「リトル、お前、なんでこいつといるんだ？」

「さっき、バズを助けてもらったんだ。」

にかつと笑う少年は、アドの足元をすり抜けて、店に入る。シンカも続いて入ろうとする。

「ここは、俺のスポンサーの店だぜ。」

若い格闘家は、金髪の青年を見下ろして言った。いいのか？入る勇氣があるのか？

そんな表情だ。

「ルーも来いよ。」

リトルアドが、振り向いて笑う。

「ああ。」

シンカは笑顔を返して、アドの脇を抜けた。

カウンターに子供と二人で座ると、シンカはソーダ割りを頼んだ。飲めないのだが。

リトルアドはジュースをもらう。医者に、さっき使ったブランデーを買って来いといわれたらしい。いつものことのようにカウンター  
の男はにっこり笑う。

「あら、初めて見る顔ね。かわいい！」

金髪の巻き毛の女が、赤いドレスの胸元を強調させつつ、シンカの前で顔を傾げてみせる。

「はじめまして。俺、ルーです。」

笑顔で答える。青年の黒い大きな瞳は、笑うととても魅力的に光る。一瞬、のまれた女性は、照れたように視線を外した。

「今日は、新しいお客さんが多いわね。ほら、あっちにも珍しい若い子達が。」

「学生？」

「あら、君もそれくらいじゃないの？」

振り向いて、ソファーに集団でいる若者たちを見つめる。

銀色の髪、赤い瞳、白い肌。  
小柄な少女と目が会った。

「ミンク！」

がたりと、立ち上がるシンカ。  
ミンクもこちらを見て立ち上がった。

### 3・ミンク4

「ルー知り合いなの？」

リトルが足をぶらつかせながら少女を見あげる。

「ね、かわいいから、彼女？」

「そうかもね。」

リトルの質問にはカウンターの女性が答える。二人の見詰め合う様子を観察しながら、巻き毛の女性は頬杖をつく。

「お前、なんでこんなとこにいるんだよ！」

シンカが歩み寄れば、ミンクの驚きの表情は消え頬が膨らむ。

「シン……」

シンカの本名を呼びかけて、ミンクは慌てて言い直した。

「そっちこそ、なんでこんなとこにいるのよ！」

「仕事だよ。お前、だめだよ。帰れよ。」

真剣な表情で怒るシンカ。それがもつともだとミンクにも理解できるから余計に腹立たしい。

そう言うシンカの様子も仕事には見えない。当然いるはずの親衛隊も、ジンロの姿もない。以前シキが言っていた。シンカがお忍びで遊びまわっているっていう、それなのだ。

だとしたら、ミンクにも言い分はある。

「私が窮屈な思いしていたときに一人でそんな格好して。遊びまわっているって、本当だったんだ！」

「別に遊んでるわけじゃないよ！」

ミンクの肩に置いた手を、誰かに払われた。



シンカより一回り大きいプラチナブロンドの男だ。学生だろう、その服装は上でよく見かける。シンカは睨みつけて言った。

「なんだよ。」

「彼女が嫌がつてるだろ。お前、ミンクの彼氏なのか？彼女にだまっ  
て遊びまわっているなんてよくないぞ。」

「そうだそうだ」と、後ろの学生がはやし立てる。酒が入っている様子。この男の目も少し酔っている。

シンカは眉をひそめる。酔っ払った学生たちが、ミンクと共にこんな場所にいるだけで苛立つ。

「ルーなんて、知らない！私、帰らないから！」

ミンクは背を向けて、奥の席に戻ろうとする。

「ミンク！」

ミンクまで酔っているのか？こんな危険な街に来るなんてわかっていたら大学なんか行かせなかった。

止めようとするクーナをすいとよけて、シンカはミンクの手をつかんだ。

「！」

振り向くミンク。

その目にうつすら涙を見て、シンカは手を緩めた。

不意に背後からクーナに組み付かれる。沸き立つ学生たちも立ち上がっていた。

「喧嘩はやめてよ！」

きゃーと女の子たちの声があがる。

ミンクも心配そうに振り返る。

その脇にブルネットの少女が立って、ミンクの肩に手を置いている。

例の、お友達か。

シンカはクーナの脇腹に肘を入れて、振り払う。

「どけよ、お前ら。」

大きな影が、学生たちの後ろから現れる。  
アドだ。

「困るな、ルー。店で喧嘩なんかさ。」  
「悪かったよ。」

シンカは内心安堵し、素直に謝った。酔っている学生相手に喧嘩したら、怪我させかねないから。それはミンクも困ることだろう。

「ルー、お前その子の男なのか？」

「ああ。」  
臆面もなく肯定するシンカに、ミンクは少し頬を赤くした。隣に立つアレクトラは冷やかすようにミンクの腕をつつく。

「二人の問題なんだ。外に出るから邪魔しないでくれるか？」

そう言ってシンカは周りを見回すと、改めてミンクに声をかける。

「おいで、ミンク。」

ミンクは赤い瞳をぎゅっとつぶって、首を振った。

シンカの瞳に哀しい色がさす。

「いやだつてよ。お前一人で出ていけよ。」

クーナがわき腹を押さえながら言った。やけに突っかかる態度のこの学生にシンカは苛立つ。

「だだよ。」

アドがシンカの腕をつかんだ。

シンカはくるりとひねって、アドを突き放した。  
店内の皆が息を飲んだ。

「お前！俺とやろうつてのか。」

不意打ちを食らったことに顔を紅潮させて怒るアド。シンカは小さくため息をつく、目の前の大男を睨んだ。

「俺と、勝負しろよ。俺が勝ったら、ミンクは返してもらふ。この間の俺の話も聞いてもらふ。」

その言葉にミンクが振り向いた。

カウンターではバーテンダーが軽く口笛を吹き、学生たちは歓声を上げた。

目の前で痴話喧嘩するミンクたち、それに絡むクーナ。彼らの好奇心はそれだけでくすぐられるのに、この青年は有名な格闘家であるアドに挑もうというのだ。

身なりのいい青年が大柄なアドに叩きのめされる姿を皆が想像する。その期待は興奮を呼び、酒を飲み干した学生たちは二人を急かす様に手拍子を始めた。

「ふん。いいだろう。その女、文句はないな」

彼らを包む一定のリズムの音は、引き返せないことを示している。シンカが、どうしてそんなことを言い出すのか、ミンクには分からない。分からないが。このまま「危ないから一緒に帰りましょう」とは悔しくていえない。

ミンクはぎゅっと唇をかね、小さく頷いた。シンカの視線を感じ、

目をそらす。

（私だって、怒ってるんだから！皇帝陛下がこんなところに一人でいるほうがずっと、皆を心配させるんだから！）  
ミンクの思いももつともだ。

シンカは軽く肩を上下させ、手首を回して身体をほぐす。

「ルールは、なしだ」

そう言えばアドは目を細める。

「いいのか？オレのほうが有利だと思うが？」

「いいよ、俺は何でも使わせてもらう。あんたと力比べしたってかなうわけないからな」

そう言つて、シンカは腰のナイフを示した。

「卑怯だぞ！」

学生の一人が叫んだ。

非難の目がシンカに向けられる。

その中にミンクがいる。じっとシンカを見つめる目は悲しそうに潤んで見えた。

泣くなよ。

シンカは、そう思う。

茶色みのかった短い金髪、深い緑の瞳で皆を見回すと、若き格闘家は言った。

「いいさ。好きにしろ。お前がナイフを使おうと、俺は負けないぜ。」

手を上げて皆を静まらせると、アドは店の外へと向かう。  
シンカも後についていく。

戸口のところでリトルアドが、シンカの手を掴んだ。  
心配そうに見上げる少年にシンカは笑いかけた。

「ごめんな。怪我はさせないから、安心しろ。」

「な、俺が心配なのはルーのほうだぞ！」

叫ぶ少年に、シンカは目を細める。

見つめる視線のほとんどが敵。二人を囲むように思い思いの場所で  
観戦を決め込んだ学生や通行人が人垣を作っていく。  
薄暗い路地に黒い人の輪が出来上がる。

シンカは憧れの格闘家と向き合う。

まさか、こういう形になるとは思わなかったが、わくわくしていた。  
初めてやりあった夜は「やっぱりすごいな」と感心したものだが。  
その相手に今は勝たなければならない。

アドは身長百九十八センチ、ウェイトは確か九十六キロ。シンカよ  
り、身長で二十センチ、体重で三十キロ以上違う。  
普通に戦っていてはかなうわけはなかった。

ジンロの言葉を思い出す。

「なんでもありなら、勝算はありますよ」

大柄なのにかなり素早い。前回のけりを食らったことでシンカは学  
んだ。

今回はナイフを使わせてもらう。

その方がいいのだ。

卑怯といわれようと、これが一番、戦った後に遺恨がない。現役格

闘家のアドが、見知らぬ青年に負けるわけには行かないのだ。だから、わざとナイフのハンデをつける。強さの基準をぶれさせることで、格闘家のプライドを守る。

聞けば「勝つつもりか」とアドは笑いそうだが。

シンカはナイフを抜いた。それは軍人用のもので、友人からもらった。軽くて、本来はシンカの体格ではあまり適していないのだが、持ち運びに便利で目立たないため、最近では長剣より、もっぱらこれで済ましている。

正対で構える。

アドは余裕なのだろう。正面を向き両拳を胸の前に軽く構える。シンカはアドの得意な左ハイキックを警戒するため、どうしても左前の構えになる。

店の窓から、戸口から、学生とリトルアドが見守っている。ざわめきが彼らを包む。

「やめておくな、今のうちだぜ。」  
アドが笑っていった。

「約束は守れよ。」  
言いながらシンカが間合いを詰める。  
同時にアドのローキックがシンカの左足に放たれる。

すっと足を上げて脛でガードすると、そのまま間合いを詰めて右ひざを繰り出す。

下がってよけるアド。

まっすぐ下がるのはくせなのか、シンカの出方を見るためか。

シンカは逃さない。そのまま詰め寄り、アドの足の甲を右足で踏みつけてナイフを突き出す。

「キヤー」

観客の悲鳴。

アドは左足を封じられたために、一瞬遅れてシンカの突き出された手をつかむ。

その一瞬前に、シンカは右手から左手へナイフを投げ移す。アドがつかんだ右手を引くのにあわせて、右反転と同時に裏拳。左手に握るナイフの柄を突き出す。飛びのいて避けるアド。

「ふん。なかなか、やるな。」

シンカの繰出す一手一手はすべて確実に急所を狙っていた。アドはそれに気付いている。

シンカはにっこり笑う。

その笑顔は、ミンクの見知らぬものだった。

胸元で両手をぎゅっと合わせて祈るように二人を見つめているミンクは、はじめてシンカが本気で戦っているところを見るのだ。ときどきして心臓がおかしくなりそうだ。

「なんだか、いいなあ」

ミンクの肩に手を置いて、アレクトラがそつと言った。

「いい？」

「うらやましいよ、ミンク。すごく愛されてるって感じで」  
アレクトラはウインクした。

ミンクは黙って、シンカを見つめた。

「心配しなくても大丈夫つすよ。ルーは俺が教えたんです」

いつの間にか背後に背の高い大柄な男。灰色の髪に鋭い視線。

「ジンロさん！」

「アドの競技用の格闘技と、ルーの実戦用のは性質が違う。アドもそろそろ気付くと思いますよ」

アドは目の前の青年が、今までと違う印象であることに気付いていた。武器を持つ相手と戦う。それも、その辺のいきがってる若者ではない。

見かけよりずっと大きく感じる存在感。そう、軍人に似ている。目の前の青年は人を殺した経験がある。そういう目をしている。アドは直感している。

あの人懐こい笑顔とのギャップが、かえってアドを嫌な気分にした。睨みつける。

次のきっかけはアドの素早い回しげりで始まった。

先日とは違って、シンカは蹴りを腕でガードした。下がらない。ここで下がったら、アドの得意なパターンになってしまう。

もう一度とばかりに放たれた左ハイキックをかがんで避けるとシンカは右に一步踏み出す。

背後を取ろうとするシンカ。



ハイキックは動作が大振りになる。放った後の隙が狙いどころだ。しかし、そこはアドが早かった。

アドは待っていたとばかりに、そのまま右ひじで裏拳を繰り出す。シンカもそこは想定内だ。

シンカは間合いを詰め、アドのひじに左手、拳に右手を絡めてひねり上げると、ぐんと押し込んでアドの軸足をはらう。バランスを崩して倒れるアド。

一瞬、シンカが有利になりかかった。

が、アドは左手で逆にシンカの胸倉をつかんで、引き倒す。投げを返された形になったシンカは、右肩から地面に落ちた。

アドが馬乗りになる。

数発、顔面にパンチを食らって、シンカの白い頬に赤い傷ができる。

完全にアドが有利になった。はずだった。

アドのパンチをよけて右上腕を左腕で絡めとり、半身を起したシンカは、アドに下から抱きつくような格好で右腕をアドの首に回す。その手にはナイフがあった。

左腕でシンカの後頭部を殴ろうと振りかざすアドに、シンカは耳元からささやいた。

「いいのか？」

刃がちくりとアドの太い首に食い込む。

アドの動きが止まった。

「卑怯だぞ。」

アドの声に、シンカは言った。

「俺は格闘家じゃないからな。言っただろう、最初から。誰かと戦うときは、相手を殺すつもりでやってる」

躊躇のない声色を感じて、アドは、黙った。

「俺の勝ちでいいかな」

シンカの問いにアドは小さく息を吐くと、悔しげに目をそらした。

その時のシンカの瞳を見つめたものは震撼したかもしれない。それは、太陽帝国軍、軍務官ゆずりの迫力ある視線だった。

冷酷な表情。

シンカは気づかなかったが。

それを、ミンクは見逃さなかった。

ミンクは初めてレクトを見たとき、シンカに似ていると思った。その時と同じ勘のようなものが働いて、やっぱりシンカはレクトの子供なんだなと思う。

強いわけだ。

感動のようなものが、少女の心にわきあがる。

心無い学生たちは、口々に卑怯だなどこぼしている。

だが誰も、正面切ってシンカに物申す勇氣はないようだった。その時点で、学生たちのほうがよっぽど卑怯だとミンクには分かった。

学生たちから離れて、シンカに歩み寄った。

シンカは立ち上がった、アドに微笑みかけたところだ。アドはただムツとしていた。

「ごめんなさい」

視線はシンカの足元のまま、少女は言った。

「二度と、ここには来るなよ」

厳しい表情でシンカが見つめる。シンカがいつものように当てる手は暖かく、ミンクは心地よいそれに涙がこぼれそうになる。その上シンカはしっかりとミンクを抱きしめるのだ。

苦しいほどのそれはとても温かい。

（私が意地を張ったから、シンカは危険な勝負をした。それなのに、私のことを気遣うばかりだ。自分のことなんて何も考えていない。）

「ごめんね。」

小さなミンクの声にシンカは額のキスで応える。

「ジンロ、ミンクを頼む」

「気付いていたっすか」

回りもよく見えていたということか。ジンロはふと珍しく笑みを漏らす。

「目立つよ、お前。ミンクを頼む。俺、アドと仕事の話をしたいんだ。でも、よく場所分かったな」

「いえ、まあ、この出身なんで」

微笑むシンカにジンロはいまいに答えた。レクトが自由にシンカの居場所を知ることが出来るなど、言えばまた親子喧嘩だ。

プライバシーも何もあったものではないが、皇帝陛下ともなればそういうものだろう。可哀想な気もするが。

「それより、俺も同行しましょうか」

笑うシンカは、いら無い、と手を振る。

「シンカ、大丈夫？」

「ああ、後でな」

ミンクはジンロに引かれて、歩き出した。

「ミンク、帰っちゃうの？」

アレクトラが、口を開いた。残念そうな口調だ。

「うん。ごめんね。私、帰るよ」

銀の髪をゆらりと翻すミンク。その笑顔がいつもよりずっと可愛らしく見え、アレクトラはまぶしそうに目を細めた。

傍らのジンロは、見上げなければ表情が分からないほど大きい。歩きながらジンロはぼそりと声を出す。

「ミンク、あんまり心配かけないでくださいよ」

「だって、シンカだって皆に心配かけてる」

「俺が言ってるのは、シンカに心配させないようにってことっす。

俺はあんたの心配はしないんで」

ミンクは頬を膨らめた。それはそうだ、ジンロがミンクを心配する必要はない。仕事なのだ。彼が心配するのは、シンカのことだけ。すねた気持ちのまま、うつむいて、ジンロについていく。

「そうね、ジンロも仕事で来ているだけだもの、本当は私なんかより、シンカのこと守るはずなんだよね、シンカのために来たんだよね、私の世話なんか頼まれちゃて、迷惑だよね」

「ミンク」

「だって、窮屈なんだもの！シンカの恋人ってだけで、一人で出かけられないなんて！折角大学に入ったのに、お友達と同じように遊べないのよ！大学も送り迎えされてるし、誰にも本当のこと言えな

いし、私だって、皆と同じように、お買い物とか、美味しいもの食べに行ったりとか、したいのに、ずっと、我慢してるのに」

ほっとしたのか、シンカに言えずにいたことが、堰を切ったようにあふれ出した。シンカのほうが大変だから、忙しいから、そう思っ  
ていつも我慢していた。

「泣かなくていいじゃないっすか！」

ジンロは少し慌てた。

理不尽極まりない状況なのに、女の涙というものは厄介だ。無視できない気分にさせる。

あまり、女の子を泣かした経験はない。女ならともかく、十七歳年下のミンクはジンロにとっては子供と同じだ。ジンロは困った。

「じゃあ、今度シンカと出かける時に、一緒に行きますか」

「！ルーと一緒にってこと？」

少女の表情がころりと変わって、華やかに笑う。

「やったあ！うれしいな、あのね、アレクトラが言ってた、とっても美味しいケーキを食べに行きたいの！だってね、一日五十個限定でね、店頭でしか売ってなくてね……」

ああ、ケーキ、それは無理かも知れない、そんなことを思いながら、ジンロはシンカの日々の努力を垣間見た気になった。

## 4・アド

「アド、約束だぞ」

シンカの言葉に、格闘家は、ふんと息をついた。見物人も、次第に減って、今は学生が店に戻る後姿を、シンカは見送っている。クーナとかいう、あのからんできた学生が最後まで、戸口でこちらの様子を伺っているようだ。シンカはにらみつけた。いきがっているだけの、学生。世間知らずの後輩をこんなところに連れてくるなんて。あんな奴がミンクのそばにいてと思うと、腹が立った。

「アド、男の約束は守らなきゃいけないんだぞ」  
リトルがアドの手を引いた。

「なんだリトル、お前こいつの味方か？」

アドに睨まれて、リトルは少し勢いを失う。リトルはアドの足ほどしか身長がない。それでも少年は、精一杯上を見上げて言い張った。  
「俺、ルーもアドも好きだ。仲良くしてくれたらいいんだ！」

シンカはクスと笑った。

アドは、あきれたように子供を抱き上げた。

「アド、あの店はダメだ。他にしよう」

シンカの提案に、アドは眉をひそめた。

「ここじゃ、だめなのか」

「スポンサー契約の話だぞ、現スポンサーの前じゃ、まずいだろ」

「じゃあ、俺のジムに來いよ」

「ああ」

アドはリトルを肩に寄せ、リトルはなんだか嬉しそうだ。その脇を、シンカは歩いていく。

通りには、車はほとんど通らない。街角にたむろする若者が、アドに気付いて、卑屈な挨拶をする。

スリの子供たちが、アドの周りを一度取り囲んで、口々に、リトル

を羨ましがって、また駆け去っていく。

その様子を見ながらシンカは、アドを選んでよかったと思っていた。アドは、この街で人気がある。

子供たちの憧れだ。

それが迦葉なんかの手下になってはいけない。

この街はまだ、死んでしまっていないとシンカは思っていた。

#### 4・アド2

アドのジムでは、数人の男が自主練習とやらを行っていた。

アドの姿を見るなり皆、お帰りなさいと礼儀正しく挨拶した。

リトルは、彼らとも知り合いらしく、男たちに混じって迫る試合の話をしている。

アドに促されて、シンカはジムの二階にある事務所に上がった。さびかけた狭い階段を上る。

そこはやっぱリヤ二だらけの曇ったガラスに囲まれて、くすんだ匂いのする、質素な部屋だった。片側に窓が一つだけある。古ぼけた事務机と、椅子、その前に壊れそうなソファと小さいテーブル。

アドが椅子に座ると、シンカは勝手にソファに腰掛けた。

「で、ルー、お前はなにを俺に言いたいんだ」

椅子の背をぎしぎしときしませて、アドは見下ろすように青年を睨んだ。

シンカは微笑む。

「ある人に頼まれてね。アド、太陽帝国を、スポンサーにしないか」アドの表情が固まった。

「あ、ごめん、説明不足だな。今、帝国では、この街の再開発を計画しているんだ。そのPR役と、本当に再開発に携わって欲しいんだ」

「俺に何しろってんだ？帝国？バカいうなよ」

アドは太い眉を不機嫌にひそめた。こんな話、してるだけでやばい。迦葉の奴らに知られたら。

せっかく明日の試合、決勝まで来れたのだ、こんな奴に振り回されて、駄目にするわけには行かない。

「アド、今のままじゃ、迦葉にいいように利用されて終わるぞ。迦葉は、お前がチャンピオンになろうと、なんだろうと関係ないんだ。お前の力と、知名度を利用したいだけだ。絶対に後悔する」



膝についた手をあごの前に組んで、じっと見つめるルーの表情は真剣だ。

「ふん、いくらもらえるんだ」

「アド、セトアイラス星のカストロワ大公って、聞いたことあるか？」

アドは首をひねる。知っていた。だが、安易に話に乗らない。調子に合わせるわけには行かない。

「大公は、有望な若者に支援しているって話。帝国も、同じように君に対して支援しようと考えているんだ」

セトアイラス星の惑星元首であるカストロワは、あらゆるジャンルの若者に支援しているという。見返りは一切ない。代わりに、それぞれの目指す分野での、宇宙規模の活躍を求めている。描く夢をかなえられる素質を持った若者を、カストロワは発掘しているのだ。

成功した彼らはそのまま、カストロワ大公の政治的影響力となつて、あらゆる分野で優位に働いている。

シンカは、そこまでするつもりもないが、アドを支援することで、地下街のイメージ向上、子供たちへの好影響を期待していた。もちろん、実質的なPR活動や、再開発後の町の運営などに、関わってもらつて予定だ。

「お前みたいなガキが、何でそんな交渉できるんだよ。本当なのかその話」

「本当だよ」

アドは、睨みつける。

「まだ、分からんな。信用できない」

「信じられたら、協力してくれるのか？」

シンカが穏やかに笑う。

その余裕の表情が、アドには、気に入らない。最初から、聞くだけのつもりだ。心を動かされたわけではない。そんな、甘い話は転がっていない。

過去にも、幾度も信用して辛酸を舐めた経験がある。

アドのジュニアクラスでの優勝賞金やファイトマネーは、当時のマネージャーに持ち逃げされた。ジムの人間にも裏切られた。

対等な契約がなくては、安心できない。試合の契約もマネージャーを持たずに、自分で行うほどだった。文字や契約に関する法的知識が足りないことにどれほど苦労させられたことか。だが、過去の失敗を繰り返すつもりはなかった。

迦葉とは、対等な契約だ。この地区のマネージャーとやらの指示に従う。代わりに試合に参加するための資金を得る。迦葉が裏切れば、情報売るだけ。互いに馴れ合う関係でないことが、アドには安心できるのだった。

「簡単に誰かに信じてもらおうなんて、甘いなお前。ま、お前が、政府の犬だってことは、はっきりした。お前の話を聞くとはいったが、お前に危害を加えないとは言っていないよな」

アドの脅しは、シンカには効かなかった。

「そうだね」

笑う。

そのとき、アドのポケットの携帯が音を立てた。

アドは、取り出して、ルーに背を向けて、立ち上がった。

「ああ、俺だ」

話しながら、部屋を出る。

#### 4・アド3

迦葉、だろうか。

なかなか、喜んでとはいかないな。アドの経歴からすれば、確かに誰かを信頼することの難しさを嫌というほど味わってる。もう、何回か交渉が必要だな。俺の正体を明かしたところで、じゃあってわけでもないだろうし。

ただ、俺が、この街をどうしたいのか、それだけは聞いてもらいたいな。アドは、この街をどうしたいんだろう。

そんなこと、考えもしないかな。

シンカは、扉のガラスから、アドが部屋の外で背を向けて話している後姿を見つめる。それをすり抜けるように、リトル・アドが顔をのぞかせた。扉のガラスの部分に、顔を出して、シンカの存在を確認すると、嬉しそうに笑った。

扉を尻で開けて入ってくる。その手には、危なっかしい持ち方で、盆に載せた飲み物が二つ。

事務手伝い、といったところだろう。

「ありがとう」

「へへ、なあ、何の話？」

二つのうち一つは、どうやら自分の分だったらしい。ちゃっかり両手でそのジュースを抱えると、シンカの隣に座った。

「アドとね、一緒に仕事したいと思ってるんだ」

「へえ、いいな、俺も仕事欲しいよ」

「お前が？」

「なんだよ、俺だって、働けるんだ！まだチビだけどき、役に立つよ」

ムキになる少年に、シンカは微笑む。子供は素直だな。

「あ、リトル、ちょっと、こつち来いよ」

戸口にいるアドに呼ばれて、少年は慌てて、飲みかけのジュースをぐぐつと口いっぱい吸い込んでおいて、立ち上がった。シンカは笑いをこらえる。

「な、ルー、お前、バカだよな」

そういったのは、アドだった。

戸口に立ったまま、手には、銃を持っていた。

立ち上がるシンカ。服の下に一応は、耐熱服を身に着けている。が、頭は無防備だ。右前の構えをとる。

アドは、銃を、傍らの少年の額に当てた。

「アド！」

「おっと、動くなルー。こいつを、殺すぜ」

リトルは一瞬、何のことか分からなかった。アドの大きな手が肩を押さえていて、硬いものが頭に当てられている。それで、ルーを脅すって、どういう、ことなんだ？

「リトル、動くなよ」

アドの声で少年はやっと、自分が人質だということに気付いた。

あわてて頭上のアドを見上げようとする。

「ルー、こいつ、殺してもいいのか？」

「アド、それは、ないだろ」

シンカは睨んだ。何か、おかしな指令が、来たのだろうか。

「いいから、お前、ナイフ出せよ」

シンカはため息を一つついて、腰にさしていた、ナイフを出して、テーブルに置いた。

「手を上げとけ」

言われるがまま、両手を挙げる。リトルは、大きな目をさらに大きくして、アドとシンカを交互に見ていた。

「アド、お前、そんなことまでするのか。リトルを巻き込んでもいいのか？それで、チャンピオンになったって、何の意味があるんだよ」

シンカの言葉を見殺しして、アドは、背後から部屋に上がってきた、黒い服の男たちに道を譲った。

男たちは、シンカを囲むと、持っていた銃でシンカの太腿を撃った。一瞬目をつぶって、歯を食いしばる。

「ルー！」

リトルが飛び出そうとするのを、アドが抑える。

「卑怯者！なんでルーを捕まえるんだよ！話すって、約束したのに、どうしてだよ」

リトルの大きな緑の瞳から、アドは目をそらした。

こんな奴に関わって、台無しにしたくないのだ。ここで、試合に出られなくなれば、今まで、何のために苦労してきたのか分からない。シンカは、男たちに引きずられて、連れて行かれる。

戸口に、さっきの学生がニヤニヤして立っていた。

「気をつけるよ、そいつ、やり手だからな、なんたって、アドを負かしたんだ。なんなら、腕の二、三本は折っておいたほうがいいかもな」

「クーナ、そいつをどうするんだ」

アドの問いに、クーナは笑った。

「ああ、アド、あんたも来てくれよ。こいつが一緒にいた男、シン口とか言うの、あれ、もともと仲間だったらしいぜ。覚えてた奴がいてさ。今は抜けて、政府の、いや、軍務官の犬になってるらしいってことは、こいつも同じだろ。帝国軍情報部のエージェントだ」アドは、背を向けながら話す学生に、ついて歩きながら、言葉を返した。

「こんな子供がか？」

「おかしくないぜ、俺だって学生だしな。一応」

クーナはにやりと軽薄な笑みを返した。

「お前だってアド。まだ十九だろ、俺より下じゃないか。それでも、組織に関わってるんだ、こいつが情報部だっておかしくないさ。それより、こいつお前に何の用事だったんだ？」

「俺の、ファンなんだと」アドは視線をそらす。  
ふんと、クーナは鼻で笑った。

## 5・拉致

5

ジンロは、ブルブルで人気のケーキのお店について熱く語りながらついてくるミンクを車に乗せると、自動操縦をセットした。行く先は中央政府ビル、特別車両用ゲート。これで、ミンクは送り返せるはずだ。

「ミンク、自動操縦で政府ビルに行くんで、着いたらおとなしく待っているっすよ。」

「うん。あの、シンカをお願いします」

赤い大きな瞳がじつと見上げる。さっきまでの元気な様子は不安を隠しているものだったかもしれない。

この子なりに反省もしているはずだ。ジンロは表情を緩ませ、ミンクの肩をぼんとたたいた。

「大丈夫っす。シンカはこの俺の弟子っすから。そう簡単に捕まったりしないっすよ。しかも、あいつは少しくらいの怪我なら平気なんすから」

「…」

ミンクは小さくうなずく。

静かに発進する車を見送ると、ジンロは電話を取り出す。

「レクトさん。連絡が遅くなりました」

「シンカは、一緒なのか？」

開口一番シンカの話が出るとは、心配なんだな。

つくづくこの冷酷な軍務官を面白いと思う。普段あんなにシンカに冷たいくせに、こういうときにはやけに慌てる。やっぱり父親だ。自覚がないあたりが面白い。少し意地悪な気分になる。

「心配すか？」

「…一緒じゃないのか？」

ホログラムの映像に映る彼は、険しい表情だ。

「今、仕事とかでアド・エトロと話してます。直接電話してみればいいじゃないっすか」

「あいつは電話なんか持ってない」

「あ、そうっすね、皇帝に電話なんて普通じゃないっすね。そう、心配しなくても大丈夫ですよ、シンカもバカじゃないっす」

何が普通なのか微妙な表現だと自覚しながら、ジンロは言った。レクトはじろりと睨みつける。が、小さいホログラムでは迫力に乏しい。

「いいから、あいつを連れてこい。わがまま言うなら殴っても何してもいいぞ。出来ないんなら、二度と、あいつが出られないように親衛隊を二十四時間張り付かせる」

「そりゃあ…」

シンカがかわいそうだ。レクトさんが真顔でさらりと言い放つあたり、本気なのだろう。親衛隊とやらは一度顔をあわせたことがあるが嫌な奴らだった。代々家系でその職に就くそいつらは、シンカに向かつて未熟な皇帝と言い放ってはばかりない。シンカの気持ちなど無視して理想の皇帝とやらに仕立てようとするだろう。

「今、店に戻つてるところっす。ああ、見えました。すぐに、連れて戻ります。心配しないでください」

「心配なんかしてない」

電話が切れた。

どう見たって心配してる。自覚はないらしい。

シンカが仕事だってんだから、それなりに考えがあって行動しているだろうに。それを心配ってだけでやめさせるのも。



ジンロは、シンカの反応を思うと、気が重くなる。今まで何回か、仕事のためのお出かけに付き合ったことがあるが、本当に仕事のためだった。そこで得た情報や、知識を、シンカは仕事に生かしている。それを、遊びと決め付けてやめさせるのも、どうかと思う。それに何も知らない世間知らずでは、皇帝なんか務まらないだろう。レクトさんも、分かっていると思うのだが。

ジンロは先ほどのバーをのぞいた。店内は暗く、静まり返っている。以前住んでいた街。ジンロにとっては懐かしい店だ。見覚えの有るテーブル、くすんだ照明、年代もののカウンター。そこには、飲みかけのグラスやつまみの皿がそのまま残っている。自然、上着の下銃に手を持っていく。そっと、店に入っていく。バリ。

暗い足元に、割れたグラスが散乱していた。

「！」

不意に何かの気配。一瞬銃を構える。子供だった。

「おっさん、遅いよ！」

カウンターの椅子の陰に、小さい子供が座り込んでいた。ひざを抱えている。泣いていたのか、鼻声だ。構えていた銃をおろす。

「お前、アドと一緒にいた奴じゃないか。アドとルーはどうした」「連れてかれたよ。ルーは、ルーは……」

今日は、よく泣かれる日だ。

ジンロは子供を立たせると、店の外に連れ出した。自分が子供を相手にしてるなど妙な気分だ。子供は目をこすりながら、まだ何か言

っている。

「俺が、強ければ、そうすればさ。ルーはバカだぞ、この街じゃみんな、自分で自分を守るんだ！俺のこと守ろうなんて、するから！優しい奴はみんな、先に死んじゃうんだ」

「ルーは、怪我してるのか？それとも、殺されたのか？」

「足撃たれて怪我してる。店の黒服の奴らに連れてかれたんだ！俺がここに来たら誰もいなくて」

「ふん。お前、他にアドが行く場所、知ってるか？」

「ジムか、家。でも、どっちもないよ」

少年が見上げると、大きな男は電話で何か話し出していた。

「そつ、怒鳴らないでください、すみません」

電話が切られたようだ。男は、一つ息を吐いて、店の戸口に、座った。

たまに、アドがしているのと同じ風だ。

「怒られたの？」

「…」男は無言だ。

リトルも、男の隣に座って、男の煙草のにおいをかいでいた。

路地はいつもどおり、薄暗い。この街は何時でも同じ明るさだ。

そろそろ、日付が変わる頃だ。リトルは、目をごしごしこすった。

## 5・拉致2

「あの、ばか！」

レクトの怒鳴り声に、ミンクは小さくなって震える。

この人、ちよつと苦手。ミンクは既に寝るばかりになって、柔らかなアルパカのカーディガンを羽織っている。

中央政府ビル最上階。そこにミンクが戻ってきた時には既にレクトが居座っていた。シンカがレクトのためにと置いてあるウイスキーがテーブルに置かれている。禁煙のはずなのに、レクトの前には煙草の吸殻が山になっていた。ちよつとムツとしたものの、それを言う勇氣はミンクにはない。

電話を切るなり、栗色の髪の子は、つかつかとシンカの執務室に向かった。

「あの」何かあったのだ。

「迦葉に、捕まったらしい」

ミンクも立ち上がる。

「かしよう？」

ちらりと、背後の少女を睨んで、レクトはシンカの机の端末を起動させる。宙に一つ、四角いホログラムの画面が浮かぶ。レクトの操作で、そこには地図のようなものが表示された。

「あの、シンカが捕まったって、その」

「場所分かった、心配なくていい。怪我でもしていても、二度と出歩かせないからな」

レクトのつぶやくような言葉に、ミンクは口をぎゅっと閉じる。私の、せいかな。

その時、ミンクの電話が鳴った。

「！」

駆けて行って、ソファの横、飲みかけたココアのカップの隣にあるそれを取る。

「あ、こんばんは」

小さく立ち上がったホログラムは、アレクトラのご両親だ。

「遅い時間にすまないね。アレクトラと一緒に思ったんだ。連絡が取れなくてね。あの子のいる場所を知っているかい？」

彼女のお父さんが穏やかな表情で言った。横でお母さんが、ミンクの周りにアレクトラの姿を探しているのだろっ、視線をあちこちしている。

「ごめんなさい、私は先に帰ってきたので…あの、場所は、その。ナンドウって言う街で」

「何ですって！」

アレクトラのお母さんが顔色を変えた。

「ごめんなさい、怖いから帰ろうって言ったんだけど…」

「久しぶりだな。ストナーレ」

振り向くとミンクの背後から、レクトがのぞいていた。

「軍務官！これは、あの、いったい…」

「詳細は後だ。情報部が動いてる。必ず助け出すから、安心しろ。

エージェントがそちらに向かう。それまでは、間違っても軍警察に通報なんかするな。わかるな？」

「は、はい」

アレクトラのお父さんは、隣に立つ奥さんの肩をぎゅっと抱き寄せ、厳しい表情で頷いた。

通信が切られると、ミンクは頬を膨らめて振り返った。

「アレクトラのご両親に、私のことばれちゃうわ！」

「なんだ？」

「だから、レクトさんがここにいるの、変でしょ！大学では私は普通の女の子なんだから！」

栗色の髪の方は、怪訝な顔をする。

「お前は普通だろうが？」

「！」

どきりとした。

ミンクは頬を赤くした。

やだ。私は、普通だ、普通の女の子なのに。

アレクトラや皆に、シンカのことほめられたりするとときどきして自分が特別な気になっていた。やだな。

自由にしたければ、直接送迎の係りの人に言えばいいし、危なくないところならシンカだって反対しない。自分でどこまで出来るかやってみなきゃ分からないのに、窮屈だって決め付けて…。シンカに反抗したり、ジンロさんに八つ当たりして。

恥ずかしい。

そういうの、見抜かれちゃったのかな。

ミンクはレクトをちらりと見つめた。

男は自分の携帯でどこかに電話している。くわえた煙草の灰が床に落ちるのにも気付かない。

「ああ、資源庁事務官の娘だ。迦葉から何かあるかもしれん、例の情報どおり手配しておけ。それから、エージェントを一人事務官の公邸へ。ナンドウに五人だ。詳しい座標は今送る」

そのまま誰かと何か話しながら、エントランスに向かう。

「あの、シンカは？」

ちらりと視線をよこしたが、レクトは何も言わずに出て行った。

軍務官が皇帝の執務室から出ると、ユージンが「お休みなさい。」と声をかける。

レクトは、電話を片手に、軽く視線を向けると、急ぎ足でエレベーターに乗り込む。

その様子が、ユージンの印象に残る。

電話の相手は、情報部長官のようだ。

何か、あったのだろうか。

ユージンは、デスクに戻ると、そっとコンピューターの電源を入れ

る。ロゲインは、文政官のIDだ。陛下の現在地を検索することができるのだ。皇帝陛下の腕にはめられている認証用のリングに、特殊な発信装置がついているらしい。いつか、シンカが黙って出かけたときに、文政官に泣きついて教えてもらったものだ。モニターに映し出された地図は、先ほどレクトが眺めていたものと同じだ。

それはもちろん違法だ。しかし、美しい彼女が皇帝陛下の認識番号と信号の周波数、侵入のためのID、パスワードを入手するために、大臣の一人に取り入るなど簡単なことだった。

「陛下」

おかしいところにいる。

この地域はレッドゾーンで、ユージンにとっては未開惑星と同じだ。美しく整えた眉をひそませる。こんな場所に陛下が好んでいくはずはない。何か強制的な圧力によってそこにいる。誘拐？

肌があわ立つ。不安が押し寄せる。

軍務官はなにも言わなかったが、秘書官として陛下が誘拐されたことに気付きもしなかった自分が悔しい。いても立ってもいられなくなる。

## 5・拉致3

「あのさ、おっちゃん、ここにずっといるのか？ルーを探しに行かないの？」

「ああ、迎えが来るの待ってる」

「車？」

「そうだ。俺じゃ、ルーの居場所は分からないからな」

「ふうん。な、ルーってエージエントなの？おっちゃんもそうなんだろ？」

「…アドがそう言ってたのか？」

「うん、エージエントってさ、帝国軍なの？軍警察とは違うの？」

「似たようなもんさ」

子供の話を適当に流しながら、ジンロはふと考えていた。

エージエント、そう思われたか。

迦葉が、エージエントを捕まえてすることは、単純だ。

情報を引き出す。殺す。

エージエントは人質にもならないし、長く生かしておくほど、危険が大きくなる。だから、必要な情報さえ手に入れば、殺す。

「…やばいっすね」

自分の話と全然関係なく、男がつぶやくのを、リトル・アドは見つめた。

ジンロはここでレクトと待ち合わせている。程なく到着するはずだ。何といっても、彼の専用機は速い。

ふと、町並みを見上げた。そういえば、久しぶりに来たのに眺める余裕はなかった。変っていない。

俺はこの子供みたいにい子じゃなかった。大人なんか誰も信用していなかった。口を利くのも嫌で。ただ、身を守るためには何でもやった。それこそ、今シンカに言えば、信頼を損ねるだろうことをしている。

信頼。それを、初めて受けたのはレクトさんにだった。

何の仕事で来ていたのかは知らない。まだ、若かった。学生のうちに軍の情報部に入ったと聞いたから、十代だったろう。同年代だった。

丁度、今のシンカのように迦葉に関わった。取引を持ちかけて、入り込んできた。

あの人は上手かった。二重三重に保険をかけた架空の設定で、当時の幹部どもは見事に騙されていた。俺だって情報部の人間と見抜いたわけではなかった。ただ、俺だけがいつも疑っていた。

それに気付いていたんだろう、最後の取引の前日、レクトさんに呼び出された。二人で話すのは初めてだった。

あの人は、言ったんだ。

「お前が、俺のことを信頼していないのはよく分かる」

「ふん、俺は誰も信じてないっすから」

そう言った俺に、あの人は笑い出した。

「なんだ、じゃあ、とんだ買い被りだったか！」

俺はむかついた。誰も信じてなかったし、誰を殺しても平気だった。いつも通り気付かれずにナイフを構えていた。

「お前、皇帝陛下を殺せるか」

そう言ったレクトさんはやりと笑った。その隙のなさに、俺はナイフを投げる事が出来ずにいた。そんなことは初めてだった。俺が、人を殺すのに躊躇したことはない。組織内でも絡んでくれれば殺す。

「できそうだな。な、お前のこと信頼していいか」

返事に困った。

それが、きっかけだった。

懐かしい。俺は、レクトさんが表立って出来ない裏の仕事を請けた。皇帝陛下の暗殺はしていないが、レクトさんに言われれば喜んでやるだろう。それは、今も変わっていない。



別に、命の恩人とか信頼関係とかそういうのではない。ただ、あの人は俺のことを信じている。それだけだ。俺は未だに誰も信じていない。ここでレクトさんに利用されて命を落としても、それはそれでいい。信じてなんかいないからだ。

それでも俺のことを信頼し続けているのは、レクトさんだけだ。

ああ、今はもう一人増えた。生きていればだが。

「おっさん、ルーは、エージェントじゃないよな。なんで、アド、わかんないんだろ」

「何だ、どうしてそう思う？」

子供は、抱えた膝にあごを乗せた。

「ルーは、俺を人質にとられて捕まったんだ。エージェントならそんなの平気だぞ。俺なんて、今日ルーと知り合ったばかりだし、俺のこと助ける理由なんてない。仕事で来てるのに、そんなやさしいこと、しないと思うんだ。そうだろう？」

アドは、ルーを捕まえるために、俺に銃を向けたんだぞ。ずっと、シンユウだと思ってたのに、アドはそうしたんだ。別に俺はそれを恨んだりしない、だってここじゃ普通だから。ちよっと、卑怯だとは思っけどさ。

ルーは違った。間違いなんだ。普通の奴なのに、間違って捕まっちゃったんだ！バカだよ、この街じゃ、ルーみたいに優しいと生きていけないのにさ！」

子供はまた、涙声になっている。

「…そうだな。けど、やさしい奴だから、俺は助けに行くんだぜ」  
「！」

少年が、灰色の髪の大きな男を見上げた。

「お前も、助けたいと思っっているだろ？」

「俺も行く！」

「そいつはいただけない」

上からの声に二人は見上げた。

「さすが、早かったっすね。レクトさん」

「行くぞ」

「はい」

シンロは、リトルアドの頭に手を置いて、軽くたたく。

「オレ、ルーのこと好きだ！絶対助けてくれよ！」

少年の声を背中に、二人の大柄な軍人は車に乗り込んだ。

軍務官は、煙草を吸うくせも忘れて、運転している。その切れ長の黒い瞳は険しい。

「アドが迦葉とつながってるとは知らなかったっすよ。シンカは、エージェントと間違えられて捕まったようです。あの子供を人質にとられたようで」

アドと迦葉のつながりは、帝国軍情報部の機密だ。民間軍事組織のミストレイアに所属するシンロが知るはずはなかった。そこを責めても仕方ない。

「ばかが、子供くらいで」

「そこが、いいとこなんすけどね」

冷たく睨みつけられて、シンロは口を閉じた。怒らせると怖い。

正直、シンロも、シンカのその心理は分からない。

守るべきものとそうでないもの。それをキツチリ分けているから、強いのだ。何もかもを、守ることなど出来ない。今、シンカのためならあの子供を殺すことだって出来る。

優しい奴は生きていけない。子供の言葉がよみがえる。

シンロの脳裏に、あの銀河戦準決勝の大会で見せたシンカの笑顔がよぎる。

## 6・終息

ぞくりと、寒気を感じて、シンカは目を覚ました。

冷たいコンクリートの床に横たわっていた。低い天井。簡単な照明は、やけに青白い光を投げかける。腕は、縛られていない。足も。

先ほど撃たれたところが痛んだ。

撃ったから、動けないと思っているのか。

そつと見回した。

足があつた。

見上げると、アドがぼんやりと肘をついて座っていた。

「なんだ、まだこんなとこにいたのか！」

シンカの言葉に、アドはびくりとして立ち上がった。表情を険しくして、足元の青年を軽く蹴った。

「ビックリさせるな！」

「驚いたのこつちだよ！試合今日だろ！こんなこと、してる場合じゃないんじゃないか！」

「お前が、そんなこと気にするなよ」

アドは、再び椅子に座った。

「大体お前が悪いぞ。こんな時に捕まるから、お前のこと俺が見てなきゃならなくなった。今日は皆忙しいんだ。ルー、お前誰なんだよ。お前の腕のリングは、壊れてるらしいし、帝国軍の情報部のリストにもないし。だいたいさ、お前、本当にエージェントなのか？」

「エージェントに見えるのか？」

シンカは、上半身を起こして痛む足をさすった。もう傷はない。それを気付かれないほうが有利か。

「間違い、か。お前、殺されるぞ」

「早く試合行けよ。時間あるのか？」

「まだ、あと二十時間はあるさ」

ふうん、とつぶやいてシンカはよろよろと立ち上がる。空いている椅子に座るとギシと苦しそうに軋んだ。

どこかの倉庫の事務所のような。警備用の小さなモニターがいくつも並んで、正面のはめ殺しのガラスの向こうに、中型の貨物用飛行艇が積載作業中だ。作業員が大勢いた。

「何やってんだ？」

見入るシンカにアドは苦い顔を浮かべた。

「さあな。俺なんかには知らされないさ、お前、大人しくしておけよ。殴るのもラクじゃないしな」

「だからさ、止めるよそういう仕事。アドの腕がそんなことに使われるのはもったいないだろ」

シンカは飛行艇の型式、積んでいるものをじっと見つめた。

「な、あれ、やばいな。自爆用だ」

「ああ、テロリストなんだぜ、当たり前さ。お前、何でそんなに緊張感ないんだ、おかしいぞ。まだ十六、七だろ？子供のくせに。…ああ、無鉄砲なだけか」

シンカは聞き流した。一応十九だけど。

「…どこかに、落とすつもりだな…！学生は？おい、あの大学生たち」

アドは目をそらした。

「だから」

「捕まってるのか？」

「俺に聞くな！」

「なんで？」

「だから……」

「やけに仲良しじゃないか？」

クーナが入ってきた。背後には、剥げた小柄な老人。幹部らしく、襟に小さなバッジがついている。黒一色の服に、小さな丸いサングラスをかけている。

「これが、帝国の犬じゃと？」

「はい、店の周りをうるちよろしてまして。あの、ジンロとか言う男と親しいようでした」

クーナが老人の脇に立って、言った。老人はつかつかと近寄ってくる。

アドが立ち上がったのと、シンカが構えたのと同時だった。

「ほ、なかなかの使い手とな。アド、しっかり押さえておけ」  
同時に脇にいたアドがシンカの腕をひねり上げた。

がっちり組み付かれて、シンカは動けなくなる。

老人のしわの少ない顔が近づく。

「ふうん。見たことが、あるな」

「ご存知ですか？その、スキヤニングしたのですが、通常のエーリエントと違ってチップも埋められていませんし、刻印もないようです。リングも壊れています。リストにもなかったもので。薬を使う前に確認していただこうと思ひましてね」

シンカは黙って睨みつける。

「ジンロといたそうじゃな」

「……」

「あれは元気か」

シンカは眉をひそめる。

「あれを育てたのはわしじゃ。使える奴だったのに、レクト・シンドラに取られてしまった。忌々しい」

レクトがジンロを迦葉から拾ったのか。

俺がアドにしようとしてることと似てるな…。

少し面白いような、悔しいような気分で、シンカは老人を睨んだ。  
シンカは冷静だった。

本来は情報部なり軍警察なりがすることだ。シンカに学生を助ける義務はない。皇帝自ら危険を冒すことは、かえって事を複雑にする。だから、自分の仕事でないと判断すれば、手は出さない。けれど…。

よく言われたよな、レクトに。自分の立場をわきまえろってさ。分かってるんだけど、ここで、一人で逃げてもなあ。

「薬を。お前、レクトとも親しいのか？」

老人の言葉に背後の男が銀色の細い棒のようなものを取り出す。自白剤だろう。気分が悪くなるが、シンカには効かないものだった。それが腕に打たれるのをシンカはじつと見つめる。

「答える、お前は何者だ？」

無言のシンカに、老人はあごで黒服に指示する。

アドに背後を固められたまま、数発腹を蹴られた。

後まで、痛いんだよな、腹部は。

シンカはそんなことを考えている。まだ、少し迷っていた。

どうする。長引けば危険は増す。

この状況から、学生を助けるところまで出来るのか。

薬が効き始め、少し頭が痛くなってきた。この後、胃がむかむかするんだ。後は耳鳴り。それをしばらく我慢すれば、治まる。医学の知識は、薬の類がどの程度自分に影響するのかを知るために役立っていた。だから、レクトも医師免許を取得することに反対しなかった。

「答える。さつさと答えれば痛い思いをしなくて済むぞ」

クーナが笑いながら、髪をつかみ上げる。

「そろそろ、効いてきたんじゃないか？」

シンカはぐったりした、フリをする。

「ふん、時間の問題だな。アド、お前はそろそろ試合だろう、行け。いいか、必ず三ラウンドまでやるんだ。ノックアウトしてはいかん」  
老人の言葉に、アドは眉をひそめる。

「試合は、そんな甘いもんじゃないです」

「誰のおかげで試合に出られると思う！言うことを聞け、お前など、言われたとおりにすればいいんだ。勝ってもいいと言われているんだ、喜んでほしいものだ」

「！」「一瞬アドが老人に詰め寄る。シンカは、床に転がされた。

「やめろ！アド！試合は仕事だぞ！いうことを聞け！契約を忘れたのか？」

クーナがアドを止めようと前に出る。軽く突き飛ばされて、派手に転んだ。

真っ赤になった学生は、怒鳴り散らした。

「お前なんか組織の捨て玉くらいしか役立たないくせに！皇帝がお前のファンじゃなかったら誰がお前なんか援助するか！逆らうなら殺すぞ！」

「なんだよ、それ」皇帝がファンじゃなかったら？  
シンカが横たわったまま、たまらなくなつて尋ねた。

「お？何だ、お前。教えてほしいか？アド、お前も聞くか？お前、この試合にすべてをかけてるってなんかの雑誌で言つてたな」

揶揄するようにクーナが笑う。老人は腕を組んだまま、アドから避けるためだろ黒服の二人の背後に立っている。

「これ聞いても行けるのか？お前、今日の試合の勝者に花束渡すゲスト、誰か知ってるよな」

シンカは目の前のクーナの足首をにらみつけた。

そうだ、俺だ。依頼があつて、俺は喜んで受けた。

「いいか？試合の始まる頃に、学生どもをテロリストに仕立ててプールエネルギー変換所を襲わせる。そいつは事前に情報を流してあるからな。そこに軍警察はかかりつきりだ。捕まったテロリストが政府関係者の子女だと知つてメディアが群がる。そう、スタジアムのすぐ近くにも報道の飛行艇が中継のために飛び回るわけだ。その間試合は行われ、優勝者に皇帝が花束を渡す。その時間に合わせて、報道用の飛行艇に化したアレが、スタジアムのだ真ん中に突っ込む。リングには、お前と皇帝。いいだろう？絵になるぜ」

「俺ごと、皇帝を殺すつもりか……」

アドは、握り締めた拳を震わせた。

「嫌なら負ければいい。三ラウンドまで目いっぱい戦つて、負けてさつさと逃げてくれば、あるいは生き残れるかもな。おっと、試合に出ないってのは、なしだぜ。何しろお前、この試合で優勝するためなら、何でもやるっていったんだ。命くらいかけるよ」

「卑怯な……」

シンカはつぶやいた。



「うるせえ」

クーナに蹴られそうになって、つい、その足を両手で受け止めた。

「放せよ、このやろう！」

狂犬のように苛立って、クーナは銃を取り出した。わき腹に、一発。

熱い痛みにはシンカは目をつぶった。防熱服は伸縮性が必要な部位は脆弱だ。貫通しているだろう。シンカはわき腹の出血を抑えて、うめいた。

「落ちてけクーナ。いずれ殺すにしろ、聞くべきことは聞かねばならん」

「あ、はあ」興奮気味の学生は苦い表情で足元の青年をちらりと見やった。もって、一時間だろう。十分だ。それだけあれば、聞きだせる。

横たわったシンカは、かすむ目でアドの足を見つめていた。

行くな、アド、試合のために命を落とすなんてだめだ。

アドの表情は見えない。

「アド、やめろ、そんなことのために、格闘家になったわけじゃないだろう！そんな試合に出るな！」

アドは、金髪の青年を見下ろした。怪訝な表情。

「だまれよ、殺すぞ」クーナが蹴る。

飛び散る血液が靴についたのが気に入らないのか、クーナはシンカの服に靴をこすりつけた。むせて、青年が血を吐いた。

アドはシンカから目を離す。誰とも、目をあわさずに椅子にかかった上着を取ると歩き出した。

「俺は、…優勝するさ。俺は勝つために戦う。試合はどうせ、いつ

も命がけだからな」

アドがクーナを押しつけて、部屋を出て行った。

「アド！ばか、…やめろ！」

シンカはまた、蹴られた。わき腹を押さえて、よけようもなく、まともにみぞおちに食らった。

そんなことのために死んで、どうするんだ、何のために…  
アド…。

前髪が捕まれた。薬の頭痛と胃の痛み、耳鳴り。それにわき腹。腹を撃たれたのは初めてだった。どの内臓のどこが損傷したのか、なにと考えようとはしたものの、すぐにその余裕はなくなった。傷を押さえる手が、震えた。意識を保つのが精一杯だ。

すぐに、傷はふさがる、痛みだけになる。そう、自分を、励ます。

「おい、起きろよ！お前は別のこと、してもらわないとな。死んじまう前に話してもらわないとな」

うつすら開いた瞳に、クーナの淡い金髪の色が映った。

## 6・終息2

「お前、何者だ？」

「クーナさん！」

誰かが部屋に入ってきた。黒服、だろう。

「この女が、うろつろしてまして」

女？ミンクは、返したはずだ…。

「きゃあ！」

その、悲鳴は？

「おや、知り合いか。だが、俺も知ってるぜ、この女ならな」

クーナがシンカのそばを離れ、戸口の方に向かうのを、床の靴音で感じる。

「なあ、有名人だ。ユージン・ロートシルト、皇帝の秘書官だ」

「やめて、放して！」

シンカは、無理やり首をひねってそちらを見上げた。

ユージン、なんで…

目が合った。彼女の目は、ごまかせないだろう。

美しい髪が乱れて、頬が赤くはれている。殴られたのか。

シンカは小さく息を吐いた。

「彼女に、触るな…」

腹の痛みで思ったほど大きくはならなかったが、クーナの動きが止まった。

「なんだあ？話す気になったか？」

しゃがみこんで、シンカの顔を覗き込んだ。ニヤニヤした顔。

「触るな。俺の秘書だ」

「お前の秘書？なに、言つて…！」

クーナの顔色が変わった。立ち上がる。

「どうした、クーナ」

老人がクーナの背後に立った。

「こいつ、は、そうか、そうだったのか！」

クーナは立ち上がると、老人の方を向き直った。

「こいつ、皇帝です、そうです、よく見りゃそうだ。目の色だけ、変えてるんですよ！」

「何！」

今度は老人が体勢を低くして、シンカを覗き込んだ。

「ほう、確かに。それで見たことがあったのか。これは」

「スタジアムに、突っ込む必要は、ないだろ…ここに俺が、いるんだ」

「陛下…」

ユージンが座り込んだ。

「申し訳ございません、私が、ご迷惑を…」

泣いている。

「どうします」

クーナの声に、老人は立ち上がる。

「うむ、そうだな、映像を撮れ。ああ、その女にやらせよう、面白いじゃないか、秘書官が、皇帝を撃つ。これはインパクトがあるぞ」

「スタジアムはどうします？」

「花火は盛大な方がいいだろう？何もやめる必要はない。そのために雇ったものが生き残っても仕方ないからな。後は任せたぞクーナ」

老人は部屋を出て行く。

「止める！アドを」

起き上がろうとするシンカに、ユージンがしがみついた。

「ダメです、陛下、お怪我が、陛下」

青年を抱きかかえて、ユージンは改めてその傷に気付く。見れば足も出血している。震えながら、抱きしめた。

死んでしまう、このままでは、死んでしまう。流れる涙が、シンカの頬に落ちる。

「ユージン、俺は、大丈夫だから、泣くな」

「陛下……」

シンカは起き上がろうとする。その血にまみれた手を、ユージンが握って、支えた。

「涙ぐましいですねえ、皇帝陛下」クーナがニヤニヤ笑う。

「俺が、何であの店に来たか、知ってるか？」

シンカの言葉にクーナはじろりと視線を投げかけた。

「お前たちの計画はもう、ばれてる。すぐに軍警察が来るさ。もちろん、エネルギー変換所の件もな。でなきゃ、ユージンがここに来られるはずはないだろう」

にやりと笑って見せた。でまかせだが、それで止められるなら。まだ少し震える手をぎゅと握ってみる。リングのレーザーがある。至近距離でなら、致命傷を負わせることが出来る。

アドが言ったとおり、壊れているのではなければの話だが。シンカは確信していた。多分、解析装置を拒絶したのだろう。このリングの素材はどんな攻撃にも耐えられるそうだ。そのように作られている。大丈夫。

シンカは、睨みつける男に言った。

「情報部を甘く見るなよ。お前らが、ここで失敗したら、どうなるんだ？確か迦葉は、失敗した仲間には冷たかったよな。お前なんてどうせ下っ端だ。捨て駒に使われて終わりだな。アドと同じだ」

「うるさい！だまれ！俺はアドみたいなゴロつきとは違う！将来、幹部になるべくして入ったんだ！俺は自力で今の大学に入った。口を利いてくれる親なんかない！迦葉に尽くして金を手に入れた！すべて俺の努力だ。あの坊ちゃん嬢ちゃんとは違う！あいつらみたいなのが、あんなバカたちの親が、この帝国を治めているかと思うと反吐が出るぜ！くだらないことばかりしやがって、世間知らずで甘ちゃん。恵まれた奴らが、一部の特権階級が俺たち庶民を押しさえつけてる！そんな国は間違ってる！」

クーナはユージンを押しのけて、シンカの胸倉を掴んだ。

「止めて！」

ユージンの声は悲鳴に近い。すぐる彼女を、クーナは突き飛ばし、シンカの首にナイフを突きつけた。

「この際だから言つてやる！皇帝、あんたみたいに恵まれた奴にはわかんねえだろうがな！この街で生きていくには、なんだってしなきゃならないんだ！体を売れる女ならまだましってもんだ！その女を上から来たあいうバカどもが買つて金を落としていく！それで細々と暮らすんだ、お前に分かるのか？その気持ち！金で買つておいて、特権階級の奴らは殴る蹴る好き放題だ！死んじまっても平気なんだ！俺の母親も殺された。子供だった俺に、奴らは金をたたきつけたんだ！俺はそいつらを殺した」

シンカは、目を細めた。

「お前に分かるか！」クーナが目の前の、皇帝をゆすった。シンカのまっすぐな視線が彼を苛立たせる。

「…分からないな」

シンカは視線をそらさずに、微笑んだ。

「俺が、初めて人を殺した時は十一だった」

若い皇帝の言葉にユージンは口元を手で覆った。

「！」

「何の理由であれ、お前も俺も、その特権階級の奴らも。同じだな」

「お、同じなもんか！」

怒鳴るクーナにシンカは小さく言った。

「ごめん」

次の瞬間、シンカの手首のリングから白い光が走った。  
それは寸分たがわずクーナの心臓を貫いた。

「きゃああ！」

ユージンが悲鳴を上げた。

顔を覆って、座り込む。

クーナの背後にいた男たちが掴みかかってきた。

一人にクーナを押し付けてかわすと肘うちを頸椎に決める。もう一人はレーザーでのどを貫いた。

はあ、と深く息をついてシンカは傍らの椅子にもたれる。

脇がまだ痛い。握った手に汗を感じる。薬の影響が少しくらくらする。それとも、内臓はまだ出血しているのかな。

ユージンは座り込んだまま、怯えている。

「ユージン、それでも俺はあなたの理想とする、皇帝なんだろうか」

ユージンは顔を上げなかった。寂しげに笑って、シンカは言った。

「行こう、早く止めないと」

スタジアムには何万という人間が集まる。アドだけではない、大勢の命がかかっている。歩こうと一歩踏み出して、足の痛みを思い出した。かばおうとして同時に脇に激痛が走る。立っていられなくなっ  
て、座り込んだ。

「はあ。撃たれたのは、失敗だった……」 急がなくてはいけないのに。  
「あの、陛下」

ユージンが美しい顔を悲しげに歪め見つめていた。

「なぜ、陛下はこの街にいらしたのですか？」

「俺は、アドをスカウトしに来たんだ」

シンカは深く息をついた。もう少し回復するまで、待つしかない。  
この状態で彼女を連れては困難だ。

静かに話し始めた。

ナンドウは今、巨大な廃棄物処理場としての再開発事業が進んでいる。今の計画では、住民はすべて移住させられる。

俺は処理場の職員として住民を雇いたいと考えているが、何しろココの住民は、学校と名のつくところに行っていない。政府関係者は住民の雇用に難色を示す。けれど仕事さえあればこの町の人間も生きる術がえられる。町も変わるだろう。

「ですが、陛下、このような街に住むものが、まじめに働くことが出来るのでしょうか」

ユージンの問いに、シンカは微笑んだ。

「子供と知り合ったんだ。元気な子だね。その子は働きたいと言っていた。友達を助けたいと言ってた。医者はこの街に留まって子供たちを救いたいと思っている。まだ、みんな、何かしたいって思ってるんだ。」



「その思いがあれば、働くことだってできる。目的が出来たら、自然と守りたいものもできる。守るものない強さじゃなくて、何かを守る強さを持ってほしいと思っっているんだ。俺、アドにこの街の子供たちを守ってほしいと思っっているんだ。今回はふられたけど。まだ、俺はあきらめてない。だってさ、この街のことを好きだって思う子供がいるんだ。俺が、この街のことあきらめるわけには行かないだろ」

シンカは思い出してやさしい表情になっている。

すぐには変わらないかもしれない。でも、アドのこと尊敬する子供たちが大人になる頃には、きっと、もったいい街になっている。簡単に人を変えることはできない。すべての人の生き方に直接関わることはできない。それでも、少しでも変えていくべきなのだ。その責任が自分にあるとシンカは思っている。クーナに一言謝ったのもその思いがあったからだ。

「陛下」

シンカは視線を秘書官に移した。彼の表情は穏やかだ。

泣きはらした目の年上の女性は、まっすぐシンカを見上げていた。華やかな笑みを浮かべる。

「陛下、私の理想など陛下には遥かに及びません。お仕えできて嬉しく思っております」

シンカが手を伸ばした。その手をとって、ユージンは立ち上がる。シンカの嬉しそうな笑みが、美しい蒼い瞳が、ユージンにはもう忘れられそうにない。

「おい、なんだ、心配させておいてラブシーンか」

戸口に背の高い栗色の髪の男。

「！レクト！なんだ、本当に知ってたんだ！」

「お前が浮気しているとは知らなかったさ。帰るぞ」  
慌ててシンカはユージンの手を放す。

レクトはシンカの傷を見て軽く眉をひそめると、強引に肩を担いで歩かせる。

「イタツ！レクト、ユージンとはそんなじゃない！浮気って言うな！」

「お前、なんか文句あるのか？え？」

ぐいと強引に引っ張られて、シンカは痛みに顔をゆがめる。怒鳴ったせいで、熱が上がったようだ。頬が火照る。

「！…アドに、会ったか？なあ、アドの試合…」

レクトの肩までしかないシンカは、どうしても見上げる形になる。切れ長の瞳にじろりと上から睨まれた。

「行かせるわけないだろう！」

シンカもしっかり睨み返す。

助けられて迷惑かけて言えることではないかもしれないが、それだけは譲れない。

「楽しみにしてたんだ！絶対に行く！止められるもんなら止めてみるよ」

「おう、息の根止めてほしいのか？あ？」

レクトは容赦ない。怪我をした脇腹をぐいと締め上げた。

「い！いた！」痛みに目がくらんだ。息を止めて男の肩にしがみつく。

「…安心しろ、ここは全部押さえた。学生どもも助け出したさ。こ

ここからは俺たちの仕事だ。お前が気にすることじゃない。ま、事前に止められたのも、お前のおかげだが」

切れ長の黒い瞳がめずらしく穏やかに青年を見下ろした。

シンカは意識がなかった。

「なんだ、聞いてるよ、ばか」

軍務官はポツリとつぶやいた。

ジンロに肩を支えられて歩きながら、ユージンは先に行く二人を見つめた。

「あーあ。レクトさん、手伝いますか？」

シンカを抱き上げようとしているレクトに声をかける。

「いらん」振り向きもせずムツとした様子の上司にジンロは苦笑いする。

「…軍務官と陛下は、仲がいいのですね」

美しい顔には一度に多くの感情を味わった後の疲労感が残る。

ジンロはいつもの仏頂面に戻すと「あんたが何でここにいるのかは聞きませんがね。シンカに迷惑かけるのはだめっすよ」と低くつぶやいた。

ジンロの視線に秘書官は小さく頷いた。

## 6・終息3

7

シンカは自室のベッドで目覚めた。室内は明るく、天井に反射する陽の光から、今が午後の時間だと分かる。

心配そうに覗き込む、ミンク。

「……ただいま」

少しまだ、ぼんやりとして微笑む青年に、ミンクの大粒の涙が落ちる。

何も言わずに少女を抱き寄せた。

「泣くなよ」

「うん。ごめんね」

「相変わらず、見せつけるな。お前は」

シキだった。

黒髪を最近短くした彼は、大きな口を開いて豪快に笑う。

「シキ。いつ来たんだ？」

「お前が無茶するから召集かかったんだろうが」

「召集？」

シキの後ろで、ソファーにもたれて煙草をふかすレクトが言った。

「シンカ、これから身分を伏せて外出するときは、ここにいる誰かを同行させる」

「げ、何だよそれ。いやだよ」

「いつもジンロじゃ、あいつの仕事にも差し障る。いずれ情報部から専用の組織を用意してやる。それまでは一人で出かけることは許さん。俺かジンロ、シキ誰かを連れて行け。分かったな」

レクトは紫煙を深く吸い込む。染み渡る煙を味わうように目を閉じた。

「……」

黙り込むシンカに、シキが笑った。

「おまえ、今、黙って出かけようと思っただろう」

「……」 図星だ。

「あのね、シンカ」

ミンクが口を開いた。

「ドクターが、ガンスさんが、ね。シンカがあまり寝ていないから、これ以上今の生活を続けると、成長が止まるって言ってるのね」

「は？」

シンカは飛び起きた。残る痛みになんて顔をゆがめる。

「なんだよ、それ！」

「お前、身長、伸びてないんだってな。だから、どこ行っても十六、七歳って言われるんだろうが」

シキが、金髪をくしゃくしゃなでる。

ジンロが、言ったのか。確かに、外に出るとどうしてもそう見られるけど。

真っ赤になって、シンカは皆を睨んだ。

「お前のまともな成長には、一日最低でも五時間の睡眠と、今度みたいな怪我をしないってことが必要らしいんだ。怪我すると回復のためにずいぶん消耗するらしいんだ。治るからって簡単に怪我するなよ。おい、心配してんだぜ、ちゃんと聞け」

シキに視線を戻す。

「かといってな。お前にどこにも出かけるなって言うのも酷だと、これはジンロががんばってくれたんだぜ」

ジンロはこの場にいない。仕事だろうか。

「あいつがさ、珍しく、レクトさんに逆らってまで説得したんだぜ」  
シキの話をレクトが引き継ぐ。

「ジンロがな、俺たちは、シンカの本当の笑顔を見てないって言うんだ。だったら、見せてもらおうと思ってるな」

「うへ。」それで、同行ってことかよ？

「まあ、いいじゃないか。俺はおまえと遊びに出られるんだ。楽し

みにしてるんだぜ」

黒髪のシキが、笑う。それは、シキとならシンカだって、きっと楽しい。

「まあ、ね。でも、遊びに行ってるんじゃないからな」

「どうだか」

冷たく言って、レクトは煙草をもみ消した。立ち上がる。

「そろそろ、時間だろ。シンカ。今日の大会は、公務なんだぞ。遅れるなよ」

「そうだ！花束贈呈！急がなきゃ！」

嬉しげに、ベッドから降りる。

よろけて転びかかる姿に、シキが大笑いする。

シンカはシキとともに出かける前に、秘書室に立ち寄った。

休みもせずに、出勤しているというユージンの顔を見るためだ。

美しい秘書官は、事件など微塵も感じさせない完璧な様子で、皇帝とその友人を迎え入れた。

いつもどおり、一つ二つ報告をする。

学生たちは無事、各家庭に戻ったこと。エネルギー変換所は、警備の増員と、情報部の事前の確認で、今のところ何の攻撃も受けていないこと。

仏心街で起こった事件は、メディアには伏せられていること。

的確な言葉で報告を終えた、主任秘書官は、じつと皇帝を見つめた。「陛下、お体は、大丈夫なのですか？」

「ああ。心配かけるなよ。ユージン。あなたがいてくれないと、仕事に差し障る。だから、今日はもう帰れ。定時は過ぎているんだ。家でゆっくりして、テレビでアドの試合見てくれよ。俺も出るんだ」  
穏かに笑いかける青年に、ユージン・ロートシルトは、珍しく照れて頬を赤くする。

こんな表情の彼女を初めて見るシキは、少しシンカをうらやましく思う。

「言ってやれ、ユージン。陛下のほうがずっとみんなに心配かけます、ってな！」

「シキ！」

からかうシキに、シンカは抗議する。

「本当ですよ、陛下。とても、とても、心配しました」

以前とは少し違う、素直なユージンの笑顔は、とても美しくやさしげだった。

一瞬見とれたシンカは、少し照れて、謝る。

「ごめん。それから、いつもありがとう」

「お前、女を泣かせるのは得意だな！」

ユージンは、嬉しさに涙をにじませていた。

「いいよなあ、ユージン。美人で有能で。気が利くし。それに、あんな顔初めて見たぜ。ありや、お前に惚れてるな」

ニヤニヤしながら、シキがシンカの髪をつつく。

「さあね。シキこそ、あんまりセイ・リンを心配させるなよ。もう、お父さんなんだしさ」

そこで小さく噴出すシンカに、黒髪の男はムツトする。

「おかしいか？俺が父親っての」

「…柄じゃない。想像できないよ」

余計に笑い出す。脇が痛いのか笑顔がゆがむ。

「俺は絶対赤毛の女の子だと思ってる。セイに似た可愛い子だ」

「セイに似て強くて」

「そう、頭がいい」

「で、シキは奥さんにも娘にも頭が上がりなくなる」

「おい」

「照れなくていいよ、嬉しいんだろ」

「ふん」

肘でつつくシンカを、軽く睨む。

「そういえば、シキ、ジンロは？」

「スタジアムの掃除だろう」

アドの周りの迦葉を押さえるのだろう。

「アドは？アドを逮捕することはないだろ？」

「まあ、事件を公表するわけじゃないからな、今逮捕は出来ないだろ。お前、そんなに気に入ってるのか？確かに、いい選手だけだなあ」

「俺、スポンサーになりたいんだ。アドに、ナンドウの子供たちを守ってほしくてさ」

「…お節介だな。それで单身、仏心街へ、か。俺は、そういうのは嫌いだ」

シキの黒い瞳が少し遠くを見る。頭の後ろで腕を組んで、ぐんと柔らかなシートに身を沈めた。その精悍な横顔を見詰めながら、シン力はまじめな顔をする。

「そうかな。やっぱダメかな。一回振られたんだ」

誰かの考えを変えさせることの難しさくらい、分かっているつもりだった。

「誰かに言われて守るんじゃ、番犬と同じだろう。ほつとけよ。アドが大切だと思えば、言われなくなつて守る。お前が見込んだんだろ？だつたら、黙って見ていてやつたらいいんじゃないか。いずれ、自分で見つけるさ」

「…、たまには、まともなこと言うんだな」

シキは笑って、青年の頭を軽く殴る。

ごほん、と二人の正面に向かい合って乗っている親衛隊の一人が咳払いした。

二人は目を見合わせる。

特別ルートを飛行する専用飛行艇は、ブルーブルーの空を静かに進む。

秋の終わりの空は、その紅葉を惜しむかのように赤く街を包み込んでいた。



超満員のスタジアムの熱気は、控え室にも伝わる。前座の試合の歓声が、地響きのように静かな部屋に聞こえてくる。

アドはセコンドを勤める年上のトレーナーに腕のマッサージを受けていた。

「アド、分かってるだろうな」

ひげの下で、大きな体のトレーナーは言った。緊張した面持ちだ。

アドは首を左右に伸ばした。

「フルラウンド、だろ。いいさ」

若い格闘家の表情は穏やかだ。

その時、控え室のドアを開けて、係員が声をかけた。

「アド選手、時間です！」

アドは黙って立ち上がる。

それにあわせて、室内にいた数人の仲間が立ち上がった。皆、一様に黒いＴシャツを厚い筋肉でパンパンにした男たちだ。迦葉の手のものだ。俺が逃げ出さないための、見張りだろう。

観客の歓声を浴びながら、腕を突き上げる。

場内が沸き立つ。

この感覚が好きだ。

腹のそこから湧き上がるような高揚感。そして、相手を見据えた時。それは不思議と静まった心地になる。

集中する。

勝つこと。それが、俺の目的だ。

それだけが、俺の目的なのだ。

生きるとか死ぬとか、そんなこと勝利の前には些細なことなのだ。

精悍な表情のアドに、大きな歓声が沸く。

「さあ、史上最年少チャンピオンの誕生なるか！注目されますね」

「今日の相手は、前回のルツシー二を下したことのあるゲツダ・シノワ選手ですからね！立ち技を得意とするアド選手に比べて、寝技に絶対的な自信を持っています！この試合、寝るのか立つのか、そこが勝負の分かれ目ですね」

「さあ、注目の試合、今ゴングが鳴らされました！」  
会場内の歓声が波のようにうねる。

アドは相手を見据えた。間を取って左に少しずつ回る。相手は寝技だけではかなわないと見たのか、打撃の腕にも自信があるのか、アドのジャブに、ジャブで返す。

ふん。

計算がある。

打撃は経験とリーチの有る俺が有利。一度打撃は不利だと悟れば、奴はタツクルに来る。その前に少し油断させる。いくつか打撃に付き合ってやる。

タツクルに来る前に、ノックアウトは出来ないが深いダメージを与えてやる。

その後に寝技に付き合ってやろう。寝技は、俺だつて得意だ。

奴は自分が上、と思っっているだろうからな。立つても寝ても、自分が不利と知った時に、どうでる？

アドはグリーンの瞳をぎらぎらさせている。自信に、力に満ち溢れている。

深い褐色の肌の相手は、黒い髪、黒い瞳。にやりとした口から見える白いマウスピースだけがやけに目に付いた。

相手のガードが低いことを知りつつも、わざとボディにワンツー。ガードで押し返ししながら、相手が離れ際のフック。それをふいとよけると、さらに前蹴り、単発でまたすぐ間を取る。

相手は、先ほどから数発食らっているローキックを警戒している。右足を浮かせて、ローに来たアドに一気に踏み込んでストレートのつもりだろう。下半身に集中している。

アドは甘くなつた相手のガードをすり抜け、一気に間を詰めて右ストリート。

慌ててガードする下から、左フックを振りぬいた。いい手ごたえ。

次の瞬間、相手の膝蹴りを察して、アドは下がった。

なかなか、やるな。

パンチを食らって、頭は真つ白だろくに反射で膝蹴りを繰出すとはな。

いつもなら、ここで、ラッシュをかけてもよかった。相手はふらついている。

だが、今日は、ノックアウトは禁じられている。

右に回りながら、アドは相手がタックルに来ることを警戒する。相手の目はまだ、どこか空ろだ。先ほどのフックが効いている。

シノワがふらと体を低く落として、一気にアドの腰めがけて突っ込んできた。

アドはそこに膝をあわせる。

突っ込んできた男の鼻先ですつとよけてやった。膝はシノワの肩口に当たって、勢いで奴はひっくり返った。

ダウンのカウント。

レフェリーがアドを手で制して、カウントを始める。

8カウントでファイティングポーズを取れなければ負けだ。

わざとよけてやった。

早く立てよ。

シノワとのあいだのレフェリーが体をどけた。再びにらみ合う。

シノワの表情が、怒りに赤く染まっている。気付いたか。

アドは、鋭く睨み返す。

瞬間、再びタツクルに来るシノワ。

今度は付き合わずに、上から押さえつける。

が、シノワの腕力は予想を超えた。

上手く腰を入れてひねると、アドをマットに押し倒す。

マウントポジション。

つまりシノワは仰向けのアドに馬乗りになっている。

ゴツ。

アドは右目に熱い衝撃を受けて、初めてそこで、場内の怒号のような歓声が耳に入った。

同時に、ゴング。

レフェリーがシノワを押しつけ、二人を離れさせた。

1ラウンド終了。

終了十秒前の音が聞こえないくらい、集中していたのか。

アドはマウスピースを外して、コーナーへ戻りながら、軽く頭を振った。

打たれた右目はどこかを切ったか、生ぬるい血の滴る感触があった。コーナーに戻る。

異変に気付いた。

同時に場内も気付いたようだ。どよめく。

「ああ、と。これは、どうしたことでしょう！アド選手の陣営に誰も、いません！セコンドはどこに行ったのか！」

眉をしかめて、アドはリングの下を見下ろした。

誰もいない。何か、あったのか？迦葉の作戦か？

係員が駆け寄ってきた。

「何かあったんですか？」

アドは黙って首を振った。

「こつちが聞きたいくらいだ」

とりあえず係員の男が、手元に置かれたタオルをアドに渡す。アドは軽く場内を見回した。皆、自分を見つめている。が。

アドは無表情のまま、係員が出してくれたコーナーポストの小さな

椅子に座った。正面に相手のコーナーが見える。タオルで汗を拭き、自分でワセリンを傷に塗り込んで止血する。

「アド、これだろ。誰もいないの、なんで？いつもでっかいおっさんたちが、たくさんいるのに」

腕に冷たい感触を得て、振り向くと、少年が氷囊を持って笑っている。

「リトル！お前、なんでここに」

受け取った氷囊を傷口に押し当てて冷やしながら、アドは言った。

「早く、ここを出ろよ。危ないぞ。後10分しかない。あいつらは、逃げたんだ」

ふと、アドの顔に皮肉な笑みが浮かんだ。

丁度三年前。ジュニアでタイトルを取る、という決勝の舞台だった。マネージャーの姿が1ラウンドで消えた。

セコンドたちがおろおろして、誰も俺の試合の事なんか気にかかけやいなかった。本気で俺の勝利を願って、俺の助けになるうなんて奴は誰もいなかった。皆、マネージャーが持ち逃げした金に、心を奪われていた。

そんなもの、くれてやる。

俺はあの時も、そう思った。

俺はただ、戦って勝つ。

結局、リングの上では一人だ。

「リトル、お前俺のこと恨んでるんじゃないのか？俺はお前を人質にしたんだぜ。俺はお前のこと友達なんて思ってたないし、必要ともしてない。リングでは一人で戦うもんだ。だから、さっさと帰れよ」少年は、大きな瞳をきらりとさせて、笑った。

「友達なんかじゃねえよ！ライバルだもん！俺がいつかアドを越えるんだから！」

「おい、帰れって……」

「それまで、アドはずっとチャンピオンでなきやダメだぞ！だから、勝てよ！バシバシって得意の右ハイで倒しちゃってさ！」

アドは、目を細めた。

少年のまっすぐな笑顔を受け止めて、アドは一つ息を吐いた。

「分かった。すぐにKOしてやる。見てろよリトル、お前なんかじゃ到底かなわないってとこ、見せてやるさ」

にやりと迫力の有る笑みを残して、ゴングとともにアドは立ち上がった。

歓声が沸き立つ。

リトルはリングからぴょんと飛び降りて、少し離れた所に立つジンの口に駆け寄った。

「アドは勝つよ！」

「だろうな」

ジンはちらりと上の階の特別席を見上げる。

こちらからは見えないようになっていいるが、今そこで観戦しているだろう青年を想像する。

ライバルか。いい響きだ。

アドは不思議と穏やかな気持ちだ。

向かい合う相手の挑発的な口元の白いマウスピースも、にやけた目も、何の感情も浮かばせなかった。

ただ、勝つ。迦葉など、スポンサーなど関係ない。

金ではないのだ。

勝ちたい、それが俺の生き方なんだ。

シノワの鋭いタックル。

膝を蹴り上げた。

鈍い感触。同時に左フックをこめかみに叩き込んだ。ずしりと手ごたえを感じる。

レフェリーのカウンタする手の向こうで、褐色の大男はうめきながらリングに両手をつく。その顔の下に赤く血が滴る。よろめいて、シノワは倒れた。

レフェリーの激しく振る手。どよめく歓声。

ゴングが何度も打ち鳴らされる。

ふん、心地よい緊張感を勝利の酔いに変えるように、深く吸った息をゆっくり吐いた。

場内は歓声が止まない。

「やりました！アド・エトロ！史上最年少チャンピオンの誕生です！見事でした！誰がこの男を止められるのか！」

アナウンサーが絶叫する。通常ならチームの仲間やセコンドが駆け寄るシーンだ。アドは、一人、リングの脇に手をかけて登ろうとしている小さな姿を認めた。

「アド！すげーよ！かっこいい！！」

その小さな手を、アドが引いてそのまま少年を肩に乗せた。

マイクを持つ。

会場が静まり返った。

「皆さん、応援、ありがとうございました！俺は、多分、勝つために生きている。だから、俺を倒したい奴は死ぬ気で来いよ！」  
歓声が沸く。

「こいつは今日、俺にライバル宣言した。俺の街に住む奴だ。俺の街はろくなもんじゃないが、そこで育った俺たちは強いぜ！俺は次も勝つ！その次もだ！」

高々と拳を突き上げると、海鳴りのように会場は歓喜の声を上げる。レフェリーの宣言を受けながら、アドの表情は輝いていた。

スポットライトを浴びて、雄雄しく立つ姿は、見るものの心を熱くさせた。

舞い散る銀色の紙ふぶき。フラッシュの嵐。

報道陣がリングを取り囲む。

シン口は黒服の親衛隊に囲まれて、それでも嬉しそうに目を輝かせて入場するシンカを見つめた。

ふと、目が合った。

シンカはいたずらっぽく、ウインクする。

シン口は珍しく、笑っていた。誰が見ても笑顔と分かる顔で。

大学構内の紅葉は散って、冷たい風が頬に当たる。

銀色の髪の少女は、上質なやわらかいカシミアの白いコートを着ている。足元のブーツも白い。

まるで、白兔だな。と、シンカに言われたが、そのまま出てきた。最近では、自分で服を決めていた。シンカはそれを喜んでいるみたいだけ。

「ミンク！」

アレクトラが、声をかける。

ブルネットの髪がくるりと風になびく。フォックスのオレンジの毛皮が、瞳の色に映える。今日は一段と華やかだ。

「おはよう」

につこりと赤い瞳で微笑む。

「ねえねえ、お父様がね、是非お二人をお招きしたいっておっしゃってるの。私の叔父様が演奏会の都合でブルブルにいらっしやるので、身内だけで小さなパーティーを開くのよ」

「もう、アレクったら、ルーに会いたいんでしょ」

「ばれた？」

小さく舌を出して、笑う。アレクトラは事件でシンカのことを知ってから、何度かミンクの家には招待されて、皇帝ではない姿のシンカに会っている。

「俺たちはご招待いただけないのかなあ！」

アレクトラの後ろから、歩いてきた『惑星の歴史サークル』のスード先輩だ。数人の仲間を連れている。

「じゃあ、うちに来る？」ミンクが笑って言った。

「えー、けど政府ビルって物々しいよな」

あの事件で、学生たちはシンカに妙な尊敬を抱いているようだ。何度目かにシンカに会ったとき、大学では俺たちがミンクを守るよ、なんて、宣言したりもした。



シンカは、嬉しそうに笑っていた。

何人かとは、友達として遊んでいるようだ。

「失礼ね！じゃあ、アレクトラのお家ね。でも、ルーは忙しいんだから、だめかもしれないよ」

「もちろん、ルーの都合にあわせるわ！」

「あれ、叔父様の都合はいいの？」

アレクトラの表情に、ミンクは笑った。

つんとしみる冷たい風。

いつの間にか季節は移り過ぎている。大学生になって、ときどきしていた日々は既に日常と化していた。それは居心地のいい時間でもあった。ミンクは改めて、皆を見回した。居心地のいい仲間たち。

もう構える必要も、隠す必要もない。不便な時はあるけれど、それは誰もが同じなんだ。アレクトラを心配するご両親のように、シンカも私のことを心配する。

それでも、何かをしたくて、変りたくて。

この時間を与えてくれたことに、本当に感謝している。

今年初めての雪が、ブルブルに舞い降り始めた。  
それは、混沌とした街を、白く白く染め上げていく。

了

## 6・終息3（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます！

『蒼い星』に続くシリーズもの。キャラクターが可愛くてついつい書いてしまった作品群です。

今回は短めですが。

実はまだ後二つ。

三つ目の作品は今回初出のユージンが大活躍  
四つ目は、故郷のあの惑星に帰ります。どちらも冒険に満ちた仕上がり、かな？

それでシンカくんの物語は終わりになります。  
拙い作品を楽しんでいただけるといいなあ。

頑張って残り二つも、公開しますね。

感想などいただけると嬉しいな。

2008・8・24 筆者拝

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8399e/>

---

蒼い星 2nd Story

2010年10月10日00時03分発行